民間のイニシアティブを重視した地域振興方策に関する調査

第２回　検討委員会　議事録

日時：平成 18 年 12 月 22 日（金）14:00～16:30

場所：米子商工会議所　大会議室

１．開会

事務局　　ただいまから第２回「民間のイニシアティブを重視した地域振興方策に関する調査」検討委員会を開会いたします。私は、国土計画局総合計画課国土政策企画官佐藤でございます。本日はお忙しい中ご出席いただきありがとうございます。議事に入りますまで司会を務めさせていただきます。

まず、本日の出席状況について確認させていただきます。各委員お手元に出席者名簿をお配りしておりますので、こちらをご確認下さい。

次に議事の公開につきまして述べさせていただきます。会議、議事録、議事要旨いずれにつきましても第１回委員会と同様に公開という取り扱いとさせていただきます。

議事録につきましては、会議終了後、事務局が作成し、各委員にご確認いただいた後、公表いたします。議事要旨につきましては、事務局が作成し、会議終了後、会議資料とともに公表いたします。この点につきましてあらかじめご了承下さいますようお願いいたします。

本日、村木委員が、飛行機が遅れた関係で遅れるとの連絡がございました。

それから、「山陰いいとこ１コメント優秀先候補」という資料を追加させていただいております。

以後の議事につきましては、委員長にお願いしたいと存じます。岡崎委員長、引き続き議事進行につきましてよろしくお願いいたします。

２．議事

岡崎委員長　　前回は、９月ということでずいぶんと暑かったのですが、12 月に入ったら寒くて大変な会議になるかなと思っておりましたが、こんなにいい天気であります。私、昨日一昨日と山形県の小国町におりましたが、そこも全く雪がありませんでした。

それでは、議事に入りたいと思います。

本日は、まず始めにゲスト委員としてお迎えした朝廣佳子さんから「なら燈火会」の取り組みについてご紹介を受けた後、委員の皆様と意見交換を行います。その後、「第１回委員会指摘事項とその対応方針」「現場検証（パイロット事業）」「事例検証」の３点について事務局より一括して説明いただいたあと、皆様にまとめてご議論いただくという形で進めたいと思います。

まず、最初に事務局から朝廣さんのプロフィールについて簡単にご紹介いただきたいと思います。

事務局　　本日ゲスト委員としてお迎えした朝廣佳子さんのご紹介をさせていただきます。

夏の奈良をキャンドルライトで演出する幻想的な観光イベント「なら燈花会」に企画段階から係わられてこられた仕掛け人の方でいらっしゃいます。その実行組織である「なら燈花会の会」の前会長でございます。

「なら燈花会」は、1999 年に第１回目が開催され、８回目となる今年は 80 万人の来訪者がいられたとお聞きしております。

岡崎委員長　　それでは朝廣さん、よろしくお願いします。

朝廣氏　　皆様あらためまして、こんにちは。奈良から参りました朝廣と申します。今日はよろしくお願いいたします。30 分ということなので、ちょっと急いだ説明になるかもわかりませんが、またご質問等あれば後ほど言っていただければと思います。

今日は、まずこの「燈花会」というガイドブックと、それから「2006」というガイドマップ、それから「当日サポーター募集」というチラシ、あと絵はがきを燈花会の関連でつけさせていただいております。

この燈花会という名前の由来は、燈花というのはろうそくの芯が燃え尽きた後に花びらのようになると縁起がいいという説にちなんで燈りの花で、会というのは宗教用語で人がたくさん集まると修正会とか修二会とか仏教で使われるんです。宗教行事ではないんですけれども、奈良でさせていただくということと、奈良でぜひ伝統行事にしたいという思いがありまして、ここに集まるすべての人が幸せになりますようにという意味を込めまして燈花会という名前になっております。

どういったお祭りかといいますと、まず皆様のこのガイドブックを見ていただければと思うんですが、これは古いんじゃないかと思われると思うんですけれども、実はこれは初めて５年目に思い切って作って 500 円で販売したガイドブックです。この後 2004 年版を作ったんですけど、もうそこから後はちょっと予算の関係でなくなってしまいましたので、絶版というか。これは貴重なガイドブックですので、古いとおっしゃらずにぜひお手元に置いてください。

会場は奈良公園で８月６日から 15 日までの 10 日間、毎晩夜７時から９時 45 分まで、２時間 45 分を毎日 10 日間、１万数千個、今年２万個になりましたが、ろうそくをともす光のイベント。これをすべて市民で運営させていただいています。

各会場が９会場に分かれていまして、１枚目をめくっていただくとこれが浮雲園地という会場です。この点々がろうそくの灯りですが、これはどうなっているのかといいますと、このコップみたいなものが並んでいます。すべて会場、基本はこの燈花会の「カップ」と私たちは呼んでいるんですが、ここに３センチぐらい水を入れまして、そこにろうそくを浮かべるフローティ

ングろうそくです。それだけの祭りなんですけれども実は、これが並んでいる。これが私たちみんなで、開発といったらおかしいですけどオリジナルで作ったんです。

これは風よけでアルミでできていますが、少々の風はこれをぱっと乗せるだけで防げるという、燈花会の基本セットになります。それが並んでいるのがこの街道です。

１枚目、今見ていただいているのが浮雲園地で、これは浮雲のデザインになっています。土地の名前にちなんで浮雲のデザインで、トップが、野山が若草山なんですね。一度はお越しいただいたことがあるかと思うんですが、若草山です。

その次をめくっていただくと浅茅ヶ原という竹灯りで飾ったエリアになっております。各エリア、少しずつ特徴をつけておりまして、こちらは竹を使ったエリアとなっています。

そして３枚目が浮見堂と鷺池。正面の浮見堂と鷺池の池の周りにカップを並べております。ここには貸しボート屋さんがボートを貸していまして、そのボートのへさきにも燈花会というちょうちんをぶら下げていて、乗っていただくとこういうふうにゆらゆらと、とても美しい光景になります。

その次が猿沢池と五十二段です。興福寺の五重の塔が写っていますけれども、その次が奈良国立博物館で、その横が東大寺、そして興福寺、春日大社で奈良町。これに加えまして現在、春日野園地というところもございます。

こういう風景になるんですけども、これはぜひ、本当は実物をご覧いただく方がずっときれいだと思うんですけれども、今日はこの写真で失礼させていただきたいと思います。

こういう祭りですが、来場者数はレジュメの方を見ていただければおわかりかと思うんですけれども、99 年に初めて始めた 9 日間で 17 万 5000 人からスタートいたしまして、徐々に少しずつ増えてまいりまして 2004 年、6 年目、一挙に 70 万 4000 人になりました。そして 2005 年、2006 年ということで、現在 70 万人ぐらいの方にお越しいただいております。当日ボランティア、私たちは当日サポーターと呼んでおりますが、この方たちも毎年少しずつ増えております。

ということで、先ほども言いました運営は、現在 NPO 法人となりましたがなら燈花会の会で、私は 2004 年まで会長をさせていただいたんですが、その会の会員と、そして期間中だけお手伝いをいただく当日サポーター、延べ 3500 人によって毎日この灯りを作らせていただいております。

なぜこの燈花会が生まれたのかと。いきなり燈花会は始められたのかというと実はそうではなく、その前身として奈良祭という祭りを行っていました。これは、奈良というのは夏枯れ冬枯れといいまして、ほとんど夏は観光客がいない。何とか伝統行事に頼らない新しい祭りを作ろうということで 1989 年、

燈花会が始まる10年前に奈良の諸団体。ボーイスカウトやガールスカウトとか、下に書いてあります商工会議所青年部、経営者協会青年部、青年会議所といったようなところが中心となって十数団体でスタートしました。各団体が一緒に一つの祭りをするというのは奈良では初めてだったので、それはそれなりに横の団体間の連携ができてとてもよかったんです。

どんな祭りだったかというと、今、平城宮跡という世界遺産になっていますが、そこに朱雀門というのが建っているんですけれども、それまではまだ建っていなくてその朱雀門を電飾で作って、その前にステージを作る。ステージは市民の皆さんのステージを募集して、市民に順々にステージに出てもらう。その前には市民の皆さんに模擬店を出してもらう。そういった祭りだったんです。

それで奈良らしさを出そうとするんですけどもなかなか、ただ単に平城宮跡という、奈良にしかない場所ではやっているんだけれども中身は市民ステージと市民サイドということで、市民の皆さんには非常に喜んでいただいたんですが、観光客が、ではそれを見にきたいかというと、観光客はなかなか奈良祭の市民の皆さんのステージを見にこようとは思わないわけです。

やっている私たちも、市民祭りをやろうと思うんじゃなくて、もともと観光の起爆剤となるものをしたいという思いがあったものですから、どうしてもそことずれてしまう。それと組織が単年度制で変わるんです。これが一番のネックだったと思うんですが、トップも団体で持ち回りと。そうすると一等下の各担当部会の責任者も全部変わるということで、次の組織が決まったころには何をしようかというともう企画会社のコンペに頼るしかない。それとタレントのライブを呼んできて人集めをしよう。そういう祭りになって奈良らしさが感じられない。

もう一つは、当時はまだ行政が主導で、行政から下にトップダウンでこんな祭りにしてくれという意向が強かった時代なので、私たちがやりたい祭りになっていかない。そういうことも含めて、もう奈良祭を１回やめようと。10年一区切りでやめて新たな祭りを立ち上げようということにしました。

ここには種々、今まで奈良祭にかかわった先輩方のずいぶん反対意見はあったんですけれども、もっといい祭りにするから一緒に何とか考えてくださいというお願いをしてまいりまして、最後に書いてあります３団体から３人ずつ出て９人で「祭りを考える会」というのを作りました。

私は青年会議所に所属しておりましてその考える会に出ていたんですが、奈良らしい祭りとは何だろうということをみんなで考えました。まずみんながやりたい祭り。

奈良に、もともと住んでいるメンバーは、やっぱり奈良というのは静かな祭りが多いので、にぎやかなことがしたいと。岸和田のだんじりみたいな、やっぱり祭りというとみんなでワイワイ言いながらやれるものがいい。音も

あり花火もある、そんなものもしたいという意見もあったんです。

でも、来られる方が奈良にそんな祭りを見にきたいと思っているのかというと、アンケートを見てもそうじゃなくて、やっぱり奈良には静けさだったり癒やしを求めて来る。やっぱりそこに特化した方がいいのではないか。

そのときにたまたまろうそくを並べたらどうかという意見がありまして、ろうそくというのは神仏にささげる大切な灯りであり、実際に８月 14、15 には奈良の伝統行事として東大寺と春日大社さんで満灯籠、満灯供養という灯りの祭りを行っている。そこにぜひぶつけて、ろうそくを使った祭りを作ろうということになりました。

でも奈良公園というのは火気厳禁だから、どうやってろうそくを並べるのか、いったい誰がそれをやるのか、どのぐらいするのか、ということをお話します。

観光客を呼ぶんだから、やはり１日や２日で終わってしまっては雨が降ればもうそれで終わり。せめて土・日が２回入る 10 日間はやるべきじゃないかと、８月 15 日から逆算しまして８月６日からにしようと。

火気厳禁のところに並べるにはどうしたらいいか。水を入れて浮かべるということで、このろうそくは３時間半持つんですけれども、水を入れて浮かべるとちょっと揺らすだけですぐ消えるんです。それで消防局に持っていくと OK が出まして、世界遺産の地でもやれるということになりました。

この 10 日間、いったい誰がやるのかと。もともと３団体で１年目やり切ろうという覚悟はありましたけれども、今まで団体間でやってきたからうまくいかなかった。絶対にそういう枠は取っ払って市民でやるべきだ。本当に燈花会が好きな人がやっていく祭りにしようということで、市民ボランティアを募集することにします。当日サポーターを募集いたしまして、おかげさまで、びっくりしたんですけども延べ 800 人の方が初年度参加してくださって、それで１年目、6000 個、10 日間、ろうそくのイベントとしてスタートいたしました。

レジュメの順番からいくと運営方法。今、言いました市民サポーターの募集ですけれども、この後５年間、なかなかその団体の皆さんと市民というのはうまく折り合わないんです。どうしても団体に入っている、所属しているメンバーは祭りを自分たちがやってきたという自負があり、誇りがあって、つまらないプライドもあって、市民が最初は会員になることすら反対して、自分たちだけでやるんだ。しんどいところだけ市民にやらせろとまで言うような恥ずかしいメンバーもいたわけです。

そんなことでは絶対に続かないということで、２年目に任意の燈花会の会というのを作って、市民の皆さんも逆に言うと慣れていないから、なかなか最後まで祭りの責任を取るということをしないんです。後は任せて、お願いしますと帰ってしまう。そういう差を縮めるために、当日サポーターの中か

らさらにちょっとだけやりたい人を募集してスタッフサポーターを作りまして、スタッフサポーターが当日サポーターのリーダーとなる。

２年目はそうしていって、３年目からはやっと会員の皆さん、団体の皆さんにも了解を得て、団体の枠を外すとともに市民のスタッフサポーターから今度は会員になってもらう。４年目には、今度はその市民の中から大学生を副会長にしました。そういうところから一挙にそういう枠が取れていったかなという気がします。組織を作るというのはずいぶん力がいったかなと思います。

成功の要因というか、そこを先に飛ばしまして、行政と地域と周辺企業とのかかわりはどうだったのかということをお話ししますと、行政は、ここがありがたかったんですけれども、１年目は県が事務局を持っておりまして２年目からは奈良市、そこが事務局を持ってくれました。そのときに奈良祭の反省を生かして、絶対に口出しをしないでほしい。私たちだけでちゃんとやるから後は任せてくれということをお願いしまして、徹底して裏方に回ってくださいました。

許認可関係とか、特に首都圏への広報、その辺は私たちよりも例えば県とかの方がずっと強いので、あるいは周辺商店街で夜 10 時まで開けてもらえないかというお願いを、一緒に１件ずつ県の皆さんも回ってくださいました。統一のアンケートの回収作業や来場者のカウント、裏方に撤してくださいます。

もう３年目ぐらいに燈花会がうまくいったときに、奈良市さんが「私たちがやりました」と一時言い出していたことがあったんです。それは、気持ちはわかるんですけどそうしちゃうと、市民の皆さんは、私たちみんな、当日サポーターや市民ボランティアに向かっても「あなたたち市の職員でしょう」みたいになってしまって、一時ちょっと殺伐としたところがあったりして、やっぱりその辺は小さいことですけれども、行政とうまくやっていくために大事なことかなと思います。

その次、周辺社寺と商店街とあったんですが、これも本当に奈良というところは新しい祭りに対しては非常に批判的です。それはやっぱり 1300 年の歴史があって、少々新しいものを持ってきてもたいがい相手にされないのです。

そういうことがあって最初は、何かやっているなという感じで、特に社寺からは伝統行事と新しい行事と一緒にするとは何事かというようなおしかりもありましたし、周辺商店街は夜７時半にはもう閉めちゃうんですね。燈花会へたくさん人が来られても閉めている。開けていただけませんかと言っても、人がいないとか開けてももうからないとか。あなたらが勝手にやっていることだから、そこに何で付き合わないといけないのかと、そういうことを毎年言われながら、それでも毎年お願いしていったところ、社寺の方は東大寺さんが８月 15 日だけ今まで伝統行事で夜は開けていたんですが、そんなに

燈花会で人が来てくれているんだったら８月 13、14 も夜間拝観を始めようと言ってくださいました。

京都とかはわりと寺社と観光がスムーズに結び付いているところがあるんですが、奈良は、寺社は観光地ではないというはっきりしたそういう意識をお持ちで、なかなか観光のために協力してくれるということが少ないですけれども、それはいい意味でもあるんですが、そのときは８月 13、14 もやろうと。それを突破口に興福寺さんも夜間拝観を実施してくださるようになり、春日大社さんも、うちも一緒にやろうかということで５年目に一挙に８会場に増えました。

そして周辺商店街は、奈良町というところが周辺にありまして、江戸時代からのまだ家屋とかが少し残る古い街並みが残っている区域があるんですけれども、そこの奈良町が、私たちのところでも一緒に燈花会をさせてもらえませんかと言ってくださるようになりまして、奈良祭をやっているころは奈良町さんに、奈良祭の灯りをともしてくれませんかとお願いに行ったら、つけてやるよみたいな感じだったんですけど、燈花会にしてから私たちは一切お願いに行かなかったんです、今度は。

そしたら３年目に向こうの方から「うちもやらせてくれ」と言ってくださって、自治会単位で奈良町でしてくださるようになりました。それを受けてそれが徐々に広がって、周辺、駅前の商店街、ずっと閉めていた商店街も開けようかということで、５年目ぐらいからやっと夜の９時、10 時ぐらいまで開けていただけるようになりました。

企業等はどうか。企業も奈良は伝統行事が多くて、そこにたくさんいろいろなところから寄付のお願いが来るので、また一つ増えたら厄介だということでずいぶん冷ややかだったんですが、地道にお願いをし、会員ですべて企業の協賛を取りにいくんですけれども、私たちも燈花会に広告を出したらこんなメリットがあるということの見直しであったり、金額による差別化だったり、そして燈花会のとにかく認知度を上げて、燈花会に協賛していることを企業が誇りに思ってもらう。ちょっとそこまで言うと大げさですけれども、そこまで思っていただけるような祭りにしようということで企業に PR をしています。

あとは毎年アンケートを取って、あるいは経済効果等を出して企業さんに、これだけの人が来てこれだけのお金が落ちているから出していただけませんかという具体的な提案をするというかたちに変えてやってきました。

６年目にたくさんなぜ人が増えたのかといいますと、５年目に５周年ということで、JR とか近鉄さんとか出していただいている、少しですけど、そういう企業さんを呼んでレセプションをしたんです。初めて、要するに生燈花会を見ていただいています。今まではお願いにいくだけで、このパンフレットをお見せするだけで、たいがいその担当者の人ぐらいしか来られないんで

す。担当者もひょっとしたら来られなかったりするんですけれども、来ていただく。

そのときに５周年ということでコシノ・ジュンコさんに浴衣のコンテストをしていただいたり、これももう無理無理お願いに上がったんですけど、松岡正剛さんとか来ていただいて、奈良の観光についてパネルディスカッションしていただいたりしたので、そういう人たちが来ているということで結構、JR も大阪支社長が来られたり、近鉄も常務さんが来られたりとか上の方に来ていただいて初めて燈花会を見た。

初めて燈花会を見てすごくびっくりして感動してくださって、これならうちはタイアップ事業にしようとすぐそこで決めていただきまして、６年目は、例えば JR さんは関西かいわいの神戸、難波とか阿倍野とか、京都・大阪周辺で燈花会のオブジェを出したり社内放送したり、近鉄さんもそうなんですけども、電車のトップに燈花会のマークを看板にしてつけていただいたり。そういうことをすごく積極的にタイアップ事業としてくださった。そのおかげで６年目には倍近い人数が、来場者が来てくださったという経緯です。

あまり時間はないのであれですけど、燈花会の、なぜ成功したのかということをちょっとだけお話しさせていただくと、レジュメの２ページに戻りますが、まずは奈良公園のロケーションであると。ですが私たちはその奈良公園も夜は暗いし灯りももちろんないですし、静かで音もない。つまらない何もないところだ。花火も上げられないつまらないところだと思っていたんですが、何もなくて静かな闇があるからこの燈花会ができたわけです。私たちが欠点だと思っていたところは、実はすごく長所だったんだと。奈良公園はお昼しか遊ぶところじゃないと思ったんですけど、実は夜にすごくすてきなところだったというのをあらためて感じることができました。

２番目はスケールの大きさと。最初無理してでも 10 日間やった。無理してでも毎日 6000 個つけていったと。４会場を使ったというところが早期に早い段階で人が増えていった要因にもなるんじゃないかと思います。それと本物の火を使っていると。

奈良というところでこれを電気でやると興ざめだと思うんですが、本物の火というのは本当に人の心を癒やすし、奈良らしさを伝えられたかなと思います。シンプルである。このカップに水を入れてろうそくを浮かべるだけのお祭りなので、誰でもどこでもできる。それが実際に、その下に他地域への広がりといろいろあちこちにカップ等をお分けしていますけれども、早く広がっていったと。

そして参加型観光である。当日サポーターとして参加していただいている方々。これは 10 日間のうち好きな日程をあらかじめ登録して来ていただくんですが、わりと観光客も多いんです。中には 10 日間東京から１人でなぜか泊まり込んでやってくれる方とか。それから広島や岡山から家族連れで旅行を

兼ねて１日だけボランティアをするとか。そういう観光客も増えていると。

実際、当日サポーターの方にアンケートを取ると、４割は奈良市内の方なんですけども、あとの３割は県内の方、あとの３割はそれ以外の、大阪とか神戸とか、あるいはもっと遠いところから来てくださっているという結果が出ています。

それから５番目がボランティアの力。当日サポーターにはできるだけ、このカップを並べていくような、ちょっとしんどいけれども楽しい作業だけをしていただくようにしています。あとの裏方は会員がする。そうすると、楽しいからまた自分の友達を呼んでくると。特にこのごろは携帯メールがあるので、「今こんなボランティアやっているよ。私が作ったから見にきて」みたいに、やっぱり自分がそのエリアを担当すると、それを見にきてほしいと。それが、ボランティアがボランティアを呼んでいるというところで増えていっているんじゃないかと思います。

６番目が地域行政、企業とのパートナーシップが先ほど説明したような感じで今、進んでいる。そしてホスピタリティーが基本である祭りだと思っています。やっている人が市民ボランティアなので、今、言ったように自分たちがつけたものを見にきてほしい。来てもらったらすごくうれしいしありがとうと思える。

見にきた人も、「こんなたくさんの灯りをいったい誰がつけているのかな」とたいがい質問されるんですけども、それを「市民ボランティアがやっています」と言うとすごく感動してくださって、「ありがとう。あなたたちがいるからこの景色ができるんですね」とすごく喜んでいただける。そういうお互いにうれしく思えるところが、燈花会が受け入れられている要因じゃないかなと。

次は単年度制からの脱却。最初に燈花会を始めたときにその祭りを考える会のメンバーを中心に、少なくとも５年はちゃんと定着するまでは変わらずにいようということで進めてまいりました。そういう前年度のことをうまく次に生かしていくということです。

そして最後は影で支えるメンバーというのは、やはり難しいところ、裏方を誰かがしないといけない。それを、枠は取っ払ったとはいえ団体で活動してきたメンバーが支えてくれた。そういうところも成功の要因になっているかなと考えます。

最後にちょっと説明しなかったので、このガイドブックの 27 ページ、「サポーターの１日」というのがあると思います。当日どうやって運営しているのかちょっとお話しさせていただきます。

８月６日まで、当日までの間は、会員は 18 歳以上なんですが、会員がすべて企画、準備、運営していくわけですが、当日は先ほど言いましたようにこのチラシの通り、好きな日を選んで参加してもらうと。

まず５時に集合します。各会場に割り振って、そこで作業の準備を聞いてからカップに水を入れて並べていきます。７時前にろうそくを一つずつ入れて、７時に点火をします。９時 45 分に消灯するんですが、それまではみんな１本ずつチャッカマンだけ持って会場を見回ってもらって、警備も兼ねながら会場を見ていただきながら、実際に消えているところに火もつけていただくと、そういういろいろな役割をしていただきます。

サポーターの仕事が簡単なので、小さい幼稚園の子どもとかも結構たくさん参加してくれます。特に子どもたちというのはすごく責任感強いですし、自分たちがここを任されると、ほかは見にいかずそこを一生懸命やってくれたりして、親子でのボランティアというところもずいぶん増えています。

９時 45 分にすべてこの灯りを消しまして、ろうそくは今、福祉作業所にリサイクルしてもらうのにすべて回しています。カップを片付けて、もと何もなかった状態に戻して１日が終わる。これを 10 日間繰り返すということで行っております。

予算ですが、だいたい 4000 万円。そのうちの 1600 万円が奈良県と奈良市からの補助金です。あと 1200 万ぐらいが大きな企業から、大きな企業といっても最高で 200 万ぐらいから、周辺商店街に１万円だけお願いしまして、そういうところを含めまして 1200 万円。あとの 1200 万円は独立自主運営で作っていっているお金です。

会場の中で一客一灯というのを行っているんですけども、それは観光客の方が火をつけたいと言われた場合、火をつけるのはサポーターの特権にしてあるんですけれども、火をつけたいとおっしゃる方のために協力金を頂いてつけていただきましょうと。１人 500 円で一つ、願いを込めてつけていただいて並べると。そのときにもちろん 500 円頂いて、記念品もお渡しはしているんですが、だいたい今、１日に 1000 人ぐらい参加してくださっています。だから１日 50 万で 10 日間で 500 万ぐらいの収入になります。

そのほかに絵はがきもそうですけれども、独立自主運営を目指して２年目ぐらいからこういうオリジナルグッズを作っていまして、そのオリジナルグッズの販売の収入であったり、あとはさっきも言いましたけれども、いろいろな地域から分けてほしいという申し込みがあった場合、このカップとろうそく、こういったセットをお分けしています。少し引かせていただいて、それでもこっちが大量に作る分、安くついていると思うんですが、それを運営資金に回させていただく。それが残りの 1200 万。それで今やっと、行けるか行けないかというぐらい結構しんどいやりくりではあるんですけども、そういうかたちで行っております。

まだいろいろお話ししたりないところも多いんですけれども、概要説明だけで終わってしまって申し訳ないですが、取りあえず終わらせていただきます。ありがとうございました。

岡崎委員長　　どうもありがとうございました。今のご説明だと非常にスムーズにできたような感じですが、大変なご努力が、10 日間やるというのは、これは大変なことですよね、継続してやるというのは。何かお聞きになりたいことはございますでしょうか。

鈴木委員　　最後に予算の話があったんですけれども、やはり NPO の予算で 4000 万円なんですよね。事業費が 4000 万ですか。

朝廣氏　　NPO の予算が 4000 万で、だから今、事務局を持っていますので、事務局の家賃と、１人事務局員常駐でアルバイトですけれども入っていますので、その人件費と、あと水道光熱費はしていけますから、それで 250 万ぐらいです。だから 3750 万ぐらいが事業費となります。

鈴木委員　　ということは、今だと事務局長というんですかね、そういう方は手弁当でやっておられるということ？

朝廣氏　　はい、手弁当でやっているので、事務局長はみんな「もうやりたくない」という、交替をしていっています。

鈴木委員　　それで、先ほど計画うんぬんということと７年目に入りましたので、これから先の、もう引退されたのであれかもしれないんですけれども、この 10 年後の将来展望をちょっとお聞かせ願えればと思うんです。

朝廣氏　　やはり、まず燈花会の質を落とさないということを常にみんなで意識していかないといけないと思うんですが、そのためにもまず人の確保。サポーターに飽きさせない工夫であったりとか、お金等はどこでも同じ悩みでこれはうちも悩みで、これを将来的にどうしていこうかというのはまだ先が見えていません。

ただ、補助金に頼る祭りはやめようということで、最初の補助金から少しずつ減っています。それは仕方がないし、私たちもそうしていこうと思っているので、できればたくさん来られる方から広く薄く何か協力金として頂けるような仕組みが作れないかなということは話をしております。

それと、やはり事務局がしっかりしていないといくらいい祭りでも続かない。それは組織全体にも言えるんですが、できれば事務局長は常駐で、例えば市の職員の方でこういう観光に携わっていて定年退職された方とか、JTB とかそういう観光関係のお仕事でリタイアされた方。そういった方に常駐でなっていただける方を今、探しております。

鈴木委員　　ありがとうございました。

田口委員　　ちょっと失礼にあたるかもしれませんけども、お話をお聞きした中で、例えば私は見学行かせていただくとして、３時間じっとその灯し火を見ていて、それで満足して帰られるのかなという若干疑問があるわけです。何かこのほかに付加価値があって、やはりそういうものを毎年行ってみようかなと。こういうことはやっておられますか。ただ単にもう、この灯し火だけですか。

朝廣氏　　いえ、ガイドブックにも載っているんですけれどもミニライブということ

で毎日、いろいろな会場で大きなステージを作るのではなく、その各会場に溶け込むようなかたちでライブ演奏を行わせていただいたりしています。

３時間なんですけど、その奈良公園の中は結構広いんです。この９会場を全部回るというのは、たぶん無理だと思います、１日では。私たちはできるだけ会場を増やせば、それだけ宿泊客が何とか増えてもらえないかなと。

今のところまだ９割が日帰りで１割が宿泊客という結果なのでそこが課題でもあるんですが、広いので、それとさっきも言いましたけど各会場に特長をつけているので、全部が同じような感じではなくいろいろ違った風景として見ていただけるというところはあると思います。

田口委員　はい、わかりました。会場ごとにそれぞれ工夫したデザイン的なものがあるということですね。

朝廣氏　はい、そうです。

平田委員　この写真とかパンフレットを見ると美しい写真がいっぱいあるんですけれど、イベントをしたときに私ども悩んでいるのは、露天商組合の方の露店がざっと並ぶ風景。これを例えば規制なさっているんでしょうか。それとも、そういう厳しいことは言わずにやっていらっしゃるんでしょうか。

朝廣氏　規制しています。

平田委員　そのノウハウを教えていただきたいんです。

朝廣氏　ノウハウというか、もうそれは、団体だけでやっているときはどこかに何かしがらみがあって、そういうのが来ると「ノー」と言えないようなところがあるんですけども、これだけ市民がたくさん入った NPO となると、市民の皆さんが、会員さんがもう絶対だめと言っているのに無理ですと今はお断りしている状態です。

平田委員　それを断る人がいて、結構嫌われ役というか。荒波を受けないといけないということはありますね。

実は今お話ししていただいた中で、平田の中で平田祭りというのが青年会議所が仕切ってやっていらしてもう何年も続いているんですけど、ただのお祭りでしかないんですね。メーン会場のお祭りはやや個性的な少し質の高いものを目指したはずが、何か類似してきたんです。それをどうやってもう一度メーン会場らしい個性のあるお祭りにするかなと思ったときに、逆に今度は質の高いのを目指すときにそういうものを排斥するというので、ものすごく風当たりの厳しいものを感じるんです。

朝廣氏　私自身、露天商は全部駄目かというと、そうは思っていないですが、ただ、設置する場所によると思うんです。ちょっと、奈良のことが具体的にイメージできないとわかりにくいかと思うんですが、駅に近いところとか、会場にそんなに影響を与えないところ。だけど、皆さんが通りすがりに寄れるようなところ。そういうところで露天商の皆さんに出ていただいても、別のにぎわいとしてはいいんじゃないかなとも考えています。

田口委員　もう一点だけ教えてください。総予算が4000万円とおっしゃって、企業の方から1200万円程度ですけども、ここ数年低迷がずっと続いておりまして、企業さんもなかなかその寄付に応じがたいという状況がおそらく続いたんじゃないかなと思うんですが、その辺あたりはどのくらいでしたか。

朝廣氏　ありがたいことにJRさんも近鉄さんも、先ほど申し上げたようなところでまずトップがOKと言ってくださったと。もう一つは、やっぱりJRも近鉄もそれぞれ個々にデータを出していますよね。どれぐらいその期間中に乗降客が増えたか。その実績を持って、続けましょうというふうに今のところは言ってくださっています。

商店街の皆さんも、今までその夏の期間にほとんどお客さんがいなかったところにこれだけの方が来てくださると。平均していませんけれども、一番多いときで伝統行事と一緒になっている日は20万人、少ない日は3万を切る日もありますが、コンスタントにやっぱり観光客が来てくださってお金を落としてくれるということに対して、1万円ぐらい今のところは出そうかというご協力をいただいている。

ただし、もちろん出していただいたところには、当日会場で配るマップにすべてその名前を掲載させていただいたり、ホームページに掲載させていただく等の措置は取っています。

田口委員　はい、わかりました。

毎熊委員　いろいろ勉強になりましてありがとうございました。特に興味を持ったのがパートナーシップということですので、例えば行政とか企業とか寺社とか、その横のつながりが、お聞きしている感じだといろいろ苦労されながら、おそらくは実績をこつこつ積まれていったということがたぶん最大の鍵だとは思うんですけど、もしそれ以外に何か横につないでいくこつみたいなものがありましたら、教えていただけませんでしょうか。

特に何か気をつけられたこととか、割合粘り強くということかもしれませんけど。

朝廣氏　確かに商店街さんはもう粘り強く、断られても毎年お願いに上がると。夜開けていただく件と、わずかでも協賛金をお願いできないかということは何度もお願いに上がっています。

それは特定の人じゃなくて、その日に集まれるみんなに声を掛けて、会員の中で回ってもらうので、今まではそんな通ったこともないような人が回ったりするわけです。会員もそういう意識を持っていただけるし、お店の人もなあなあで団体、今までのそういう人が来るんじゃなくて、全然違う主婦の会員の人とか、定年退職された方とかがひょっこりやってきて「お願いします」とか。僕たちは苦労して、私たちは苦労してやっているので頑張りますというようなことをPRされると、お店も「はい、わかりました」みたいな。

今までこうするのが当たり前じゃないかみたいなところをちょっと外し

て、いろいろなことをいろいろな人にやってもらっているというのも、いいのかなと思います。

石村委員　　これがやっぱり続いているのは質を落とさないということで、かなりそのデザインとかにも配慮されていると思いますけども、これは、例えばデザイナーだとか、よく最近、光のデザイナーというのはいらっしゃいますけども、そういう方が参加されているのか。それとも本当のスタッフさんでアイデアを出されてされたのか。

その辺の質を、まずこういうことを企画して実際やってみて、質を維持していくと。さらに内容のいいものにしてやらなきゃいけないということで苦労されていると思うんですけども、そのあたりの取り組み。デザインを作っていらっしゃるデザイナーとか、いらっしゃるということも教えていただければと思いますし、そのあたりをお願いいたします。

朝廣氏　　その青年団体というといろいろな業種の人が集まっていて、それこそ電気屋から印刷から建設関係いろいろあるんですけど、その中にそういうデザイナーも入っています。測量士も入っていますから、そういうメンバーでデザインをし、実際にこれもちゃんと測量してピン打ちをしてやっているという状況です。

石村委員　　プロというか、本当のその灯りのデザイナーという種類の人じゃなくて、地元のスタッフだけで基本的にデザインは決められてやっていらっしゃると。

朝廣氏　　もちろんプロのデザイナーの方にもご相談して見ていただくということもしています。ある程度、ここは来てもらったサポーターに自由にデザインしてもらってもいいですよというところも作って、そこはその日に来た当日サポーターさんが自由にデザインするようなところもあります。

岡崎委員長　　私、昨年まで総務省の関係で「ふるさとイベント大賞」というのがありまして、その審査員をやっていたんです。それで、委員長がライトアップデザイナーの石井幹子先生だったんですね。それで、確か大賞か何かをこれは取られたイベントでしたよね。

それ以降からやっぱり夜、全国的なレベルで、例えば田舎だと棚田のライトアップとか。それから重伝建の地区ですと、そういう古い町並みのライトアップ。そういうのも、こういう、ろうそくなんかを使った意味でのライトアップが非常に盛んになってきたという認識をしているんです。

ちょっと最後お聞きしたいのは、これは９カ所ですよね。かなり広範囲。それから 10 日間連続してやると。それから子どもが参加している。すぐ消えるとはいえ火を扱っているという、やっぱりこれをやり通すとしたら大変な、全体の統率力といいますか、組織的な。それが非常に必要だと思うんですが、それはどこがどういうふうにどういう方がマネジメントされているのか。そこが一番気になるんですが。

つまり、それほど、県庁の方にお願いするとか、市役所の組織を活用してそれでやるとかということではなくて、それこそ、全くおっしゃったようにパートナーシップとか、市民と、ある意味では行政の連携ですね。まさにこの委員会でやっている「新たな公」みたいな話を使って、どういう中核の人がおられて、どういう組織があって全体をマネジメントしているのかという、ちょっとそれがわからないんです。

朝廣氏　やはり中枢になるのは団体に所属している、あるいは所属していた、今はOB となっているメンバーです。そういう人たちが中心になってみんなを統率する。でも市民の中からもリーダーは育ってきていまして、OL だったり大学生だったり、そういう人も積極的に、そういう人にも役員になってもらうようにして、また違う切り口の意見をもらったり。

どうしても、団体と市民を分けるのはおかしいんですけれども、なかなか組織でしか動かない人が、他の普通の主婦の皆さんやそういう人たちの意見をすぐわかるかというと、わかりづらいんです。そういうところの中間的な意見を言ってもらえる人を入れたりとかいう工夫はしています。

基本的にやっぱり、好きなんです、みんな、燈花会が。やっていると面白い。さっきも言いましたように、いろいろな人がすぐにきれいだとか、ありがとうとかいう言葉をその場で掛けていただくのですごくやりがいがあるんです。そこがみんな、そこにだから自分の存在感を感じたり、奈良を誇りに思う気持ちが生まれ、やめられなくなっていくと。やっぱりそこだと思うんです。

だから、けがしないようにとか子どもたちをいたわったり、お年寄りが転ばないようにここをどうしたらいいと、いろいろなこともすべて燈花会が好きだから生まれていくことだと思います。

鈴木委員　それは非常によくわかって、やっぱり個々人の責任感をうまく利用してこれだけのことをやられていると思うんです。ただその中で、やっぱり朝廣さんの果たした、ご自身からおっしゃるのはなかなか難しい部分があるかもしれないですけれども、９人の方で会が始まって、それを代表されて今日も来ていただいているんですけれども、それはやっぱり、朝廣さんはそれなりの役割を果たされたかなと勝手に想像しているので、９人がそもそもどういうメンバーであったのかという、年齢とか男女比とか。その辺と、その中で朝廣さんはどんなふうにして代表みたいなかたちで今、今日来られることになったのか。

その話をお聞かせいただいて、最後に「「奈良らしさ」という話があったんですけれども、奈良らしさとは今、ご自身でどういうことのなかということを、ちょっと一言ご披露いただけたらありがたいと思います。

朝廣氏　その９人というのは、各、さっきレジュメに書いてある３団体から３人ずつ出てもらっていまして、私は青年会議所から出ていたんです。

当時、１年前に立ち上げたので副理事長だったんですけれども、女性は私１人で、あとは全員男性です。奈良出身でないのは私１人で、あとは全部奈良で生まれ育った、そして今も奈良で仕事をしている皆さん。私は20年前に奈良に嫁いできたよそ者なんですけれども、というような構成です。

みんなは、さっきも言いましたけど、もっと違う祭りをしたいという話で、私はどうしてもこれがしたいと言ったら、そんなにしたいならおまえがやれと。絶対にやるといって始めたのが私が実行委員長になったきっかけです。

自分のことを言うのもあれですけど、私は突っ走るタイプなんです、とにかく。もうやりたいと思うと、ガッと突っ走る。でも私がただ単に突っ走っているだけでは、上の人は誰もいないわけです。でも、それをみんな一緒についてこられるようにしてくれるメンバーがそばでサポートしてくれて、私が言いたいことを代弁して伝えてくれたり、あるいは、そういうふうにあらかじめ根回しをしてくれて、そういったメンバーが回りにいたのでできたと思います。

だから、私はただやりたいといって、本当にワーッと走っていっただけなので。

鈴木委員　それがたまたまその９人のメンバーの中におられたということですね、サポーターをしてくれる方。そういう方は別におられたんですか。

朝廣氏　１年目はいなかったです。でも１年目はとにかくやろうということで、みんなも何かをしなければいけないと。

鈴木委員　違うことを何かしなくちゃいけないと。

朝廣氏　ええ、というのでやったというところ。

鈴木委員　最後に「奈良らしさ」ということを一言お願いします。

朝廣氏　皆さん違うと思うんですが、私が思う「奈良らしさ」というのは、皆さん、ふるさとをお持ちなんだけども、でも、やっぱりここに来ると日本のふるさとや何かを感じていただける。ほっとすることができるというのが奈良らしさかなと思っています。

鈴木委員　ありがとうございました。

岡崎委員長　どうもありがとうございました。非常に参考になるお話、プレゼンテーションだったと思います。

朝廣さんは、このままここへご一緒していただいてもよろしいですか。

事務局　後半の会議も、出ていてもし感じたことがあればご発言いただければと思っております。

岡崎委員長　それでは、続きまして事務局の資料説明に入らせていただきます。冒頭に申し上げましたとおり各議題について事務局より一括して説明いただいたあと、皆様にまとめてご議論いただくという形で進めたいと思います。それでは事務局から資料説明お願いします。

事務局　　それでは事務局の方からまとめて説明をしたいと思います。この資料に入る前に参考資料のところで１点だけお話ししておきたいことがございまして、参考資料の１のところですが、国土審議会の計画部会の「中間とりまとめ」をこの 11 月にまとめましたので、そこでこの委員会と関連するところだけ若干ご説明したいと思います。

参考資料の 1-1、1-2、1-3 と三つありますけれども、1-1、1-2 はその概要を示したもので、1-3 で部分的にご説明したいのは、1-3 のところに目次がございますが、この中で第３「計画のねらいと戦略的取組」で、「（５）新たな公による地域づくり」と書いてございます。具体的には 25 ページになりますけれども、25 ページをお開けいただければと思います。参考資料の 1-3 です。

25 ページのところで真ん中辺ぐらいに「新たな公」というのが書いてございます。これは地縁型コミュニティだとか NPO だとか、いろいろな多様な人々が連携しながら進めていこうというところです。

その中で 26 ページの真ん中あたりですけれども、「中間的な支援組織」というのがここでございまして、真ん中辺のあたりに、「行政においては」というパラグラフが始まるところですが、それの５行目ぐらいですけれども、「多様な民間主体の活動を一定の目的に向けて総合化したり、それら同士の間やそれらの行政との間の相互理解を促進するなどの役割を担う中間的な支援組織の育成や当該組織を担う人材の育成等もケースに応じて行うことが必要である」ということで、今、中間とりまとめの記述がこうなっております。

国土審議会の計画部会の方は、今この中間とりまとめをもとに各方面からいろいろ意見をお聞きしているところで、さらにこれから最終報告に向けて今、現在作業しているところでございます。１点だけちょっと関連するところをご報告させていただきました。

それでは続きまして、資料３についてご説明したいと思います。資料３が第１回の検討委員会での指摘事項、主なものをピックアップいたしました。それの対応方針についてというのをまとめてございます。中身も、ちょっと内容に沿って分類したかたちでまとめて書かせていただいております。全部は説明しません、お読みいただければと思うんです。それから、この後パイロット事業の中で出てくる部分もございます。

若干ご説明しますと、資料３の１ページ目のところに「連携強化・マッチング」というのがございまして、数字で⑤、⑥、⑦と打っているところがあります。これは中間支援組織のご指摘で前のイメージ図として出したものが、中間支援組織それぞれの個別に支援するようなイメージしかなかったものに対して、いろいろな間の連携を強化する役割があるというお話がございました。

それに関連しまして資料４を見ていただきたいと思うんですけれども、資料４に前回の中間支援組織のイメージを図示して資料でお示ししております

が、それをちょっとここのご指摘を受けて変更いたしましたものです。それで中間支援組織でこの中に数がいっぱい出てきていますけれども、一つ一つが１個ずつに対応するという趣旨ではなくて、こういう部分で中間支援組織の役割があるということを図示したものでございます。

第１回目の委員会のときには、その真ん中にあった中間支援組織からそれぞれその企業とか行政とか市民とかに対して、ここは人材のところが１ページ目に出ていますけれども、その登録をしたり検証をしたりと個別にやったところだけしか役割が十分見えない感じだったんですが、それぞれの間の連携を強化したりとか、それから市民の中の市民同士の連携だったり、行政の壁を超えるような連携だったり。そういう連携の強化をわかるようなかたちでイメージを作り直したというところでございます。

それからまた資料３に戻っていただきまして、⑨でFace To Faceのつながりの場が必要だというご指摘がございました。これにつきましては現在、仮想の中間支援組織でパイロット事業を動かしておりますけれども、その際に松江市民活動センターのブースを実はお借りいたしまして、その場でFace To Face ができるような場を確保したりとか。それから今日も予定しておりました、講演会の後に交流会をするようなかたちでそういう場を作っていこうという取り組みをしております。

それから２ページ目をめくっていただきまして⑭ですが、理事会のかたちについて、非常にその事業展開をする中で理事会が重たいのではないかというご指摘がございました。これにつきまして今回の仮想中間支援組織では事業展開の最後の意思決定は事務局で行うというかたちにしまして、それを理事会の準備会で行ったんですが、その中でも確認しながら進めております。その上で理事会の役割はどういうものが望ましいのか、事業を進めながら検討していこうということになってございます。

あと残りのものについては後ほどのパイロット事業の説明の中でも出てくるかと思いますので、説明は省かせていただきます。引き続いて事業の方の説明を。

事務局　資料の５ですが、こちらは「仮想中間支援組織の設立と活動の経緯」ということで、前回の検討委員会が９月19日にありましたが、それから３カ月たちまして何をやってきたかということを１枚にまとめたものでございます。だいたい１カ月おきにヤマ場を設けておりまして、それまでに何をしてきたかということでご説明したいと思います。

最初の１カ月は地元の活動団体さん、自治体ですとかNPO、こちらの方に個別に趣旨説明ですとか参加の呼び掛け、ヒアリングをしてまいりました。そして１カ月後の 10 月 11 日、理事会の設立準備会ということで、参考資料６の方にメンバーさんを書いておりますけれども、自治体、商工会議所、商工会、NPO、アドバイザーの方に入っていただきまして調査の趣旨説明ですとか、

この仮想中間支援組織の説明と理事会への参加要請をいたしました。

同日、理事会ではなくその下に当たりますけれども事務局を設置いたしまして、そこの準備会ということでパイロット事業の目的の説明ですとか、企画の検討の進め方などを検討しておりました。

そしてその後１カ月の間で事務局スタッフの構成を調整したり、パイロット事業をどう分担していくかということを粗々検討させていただきまして、次の１カ月として 11 月８日の時点で事務局で全体の会議をしたと。そして 16 日に第１回の理事会を開きまして、そのパイロット事業の企画案の進捗状況を報告させていただくとともに意見交換をさせていただきました。

そしてそのご意見も伺いまして、事業の詳しい内容を再検討、再調整して、一部事業を着手して、先週第２回の理事会を開きましてそのことについてご報告、意見交換した次第でございます。

では資料６以降にパイロット事業の詳しい内容についてまとめてみましたので、この一覧に沿ってご説明したいと思います。

パイロット事業は大きく６つございますが、それぞれについて約１枚ごとにわかりやすく説明をさせていただきたいと思っております。

まず、Ⅰ-1 と 2 ということで「ポータルサイト・マップ事業」というものがございます。そちらは現状としまして、さまざまな観光関連のサイトがございます。参考資料の 7-1 という A3 の大きな紙になりますけれども、こちらの方で複数の観光関連のサイトをさせていただいております。中でも「山陰観光・旅のポータル」ということで、中海・宍道湖・大山圏域観光連携事業推進協議会さんが作られているものですが、こちらが官民連携しながらやられているということで、こちらについて特に着目して課題などを整理させていただきました。

資料６の下の方に「課題」ということで書かせていただきましたが、この「旅のポータル」で、圏域全体のポータルということで進めておりますが、なかなかコンセンサスが十分でないのではないかといろいろな方からご意見をいただいております。こちらにつきましてはさまざまな方がかかわられて作っているということですが、まだまだ多様な主体の参加が必ずしも十分ではないのではないかという課題を感じております。

そして、この旅のポータルには大きくざっくりですけれども、新着情報などのフローの情報と観光施設の情報、ストックの情報という二つがございます。左側のフローにつきましてこちらの情報をどんどん上げる必要があるんですが、地域が広いわりに運営スタッフさんが足りないという状況がございます。

そして右側の観光施設などのストックの情報。こちらも一度作られてからなかなか更新されないとか、地域や施設間で情報の密度の差が見られるといったような課題がございます。

そして、その下の④ですけれども、こちらはこの旅のポータルの性質上といいますか特性上、最初から盛り込んでいないことですが、市民活動の情報ですとか口コミ情報が全く載せられていないという状況がございます。

そして⑤は飛んでしまうんですけれども⑥としまして、このサイトだけではなくて観光マップもさまざまなところで出されているんですが、そちらの方の機能とかコンテンツが重複しているんではないかということを課題として感じております。

これはさまざまな主体の方が作られているものですので当然発生していることですが、これから観光客が見てわかりやすい情報とか効率よく作るということを考えていくと、ここのあたりを調整してはどうかということで課題を感じているものでございます。

では、仮想中間支援組織で何を行うかということを２ページ目に整理させていただいております。

それぞれの課題に対応するかたちで書かせていただいておりますけれども、まず①として、コンセンサスが十分ではないのではないかというのがございますので、仮に神秘性、ミステリアスというテーマを設定しまして、それをテーマにした新規のコンテンツを関係する方々皆さんでワークショップを行いながら作成する。これを中間支援組織として活動を支援していこうというものでございます。

そして合わせて圏域のイメージについてもこの中で検討していきたいというものですが、こちらについては先ほど最初に追加資料として出させていただきましたけれども、「山陰いいとこ１コメント」ということで、既にこういった市民の方々から、またこれは圏域の方々が多いんですけれども、こういった方々からいろいろな意見を頂いております。また後ほどご覧いただければと思います。

パイロット事業の②ですけれども、先ほどは運営スタッフさんが不足しているというものがございましたので、こちらにつきまして特派員というかたちでさまざまな方を、こういった記事を作成することにかかわっていただいてコンテンツを充実させていくことを支援していきたいというものでございます。

そして③は、施設運営者による情報更新を直接できるようなシステムを構築したり、宣伝・普及していくということをやるのに際して立ち上げを支援するというものでございます。

そして④は、市民の口コミ情報ですとか活動情報がないというものがございましたので、こちらの方を新たに市民が、市民も圏域の中の人、外の人を含めてこちらの人たちが自由に投稿できるシステムを構築しまして、相互に交流を促すということで全体の活性化を図るとともに観光資源としてもこういうことを発掘していこうというものです。

こういった情報をすぐインターネットを使って載せればそれで活性化するんじゃないかということではなくて、なかなかインターネットに触れられない方もたくさんみえられると思いますので、この枠の外側にちょっと書いてありますけれども、情報発信はしたいけれどもインターネット、パソコンに習熟されていない方がみえられる一方で、今、島根県の方で地域 IT リーダー養成講座というものが開かれております。こういった講座を受けてもなかなか活躍する場がないという方が結構みえられますので、こういった方々を中間支援組織としてマッチングしていこうということで、⑤の事業を検討しております。

右上になりますけれども⑥では、先ほど申しましたさまざまなマップですとかポータルサイトがありますので、そちらの方の連携を図っていくということをこちらで検討しまして、それを各団体さんに提案していこうというものを事業として考えております。以上がポータルサイト・マップ事業の概要でございます。

続きまして I -3 ということで、「フリーペーパー事業」と書きました。こちらにつきましてもフリーペーパーというのが参考資料 7-1 の４枚目になりますけれども、さまざまな主体さんで、企業さん、財団さんも含めていろいろなところでフリーペーパーが作成されているというものでございます。こちらの方、勝手ながらなんですが課題として書かせていただきました。作成に当たって人手とか資金の面でかなり負担が大きいとか、スポンサーが重なっているところも見られる。あとは、圏域外からどれを見たらいいんだろうということで迷うようなこともあります。これがどういった経路で配られているのか、どういった人をターゲットにしているかということも、ちょっとあいまいな部分もあるのかなと感じております。

こちらにつきまして中間支援組織としては、フリーペーパーが今どういうふうに作られていて、どういったふうにやれば効率化できるのか、効果が最大に得られるようになるのかということを、提案を作りまして各組織に出していくということをやっていきます。

そして４ページ目、I -4 としまして、「圏域外情報の収集・共有事業」というものを挙げております。こちらは圏域外の住民の方々がこの地域に対してどういうニーズがあるのか、どういうイメージを持っているのかということがきちんと把握されているのかということがありますけれども、それがこちらの商品開発とか販売戦略の方にきちんと情報が行っているのか、そして、それで共同戦略などが立案されているのかといったところが少し疑問な点があります。ですので、こちらにつきまして中間支援組織として、まず圏域外の住民の方々がこの地域に対してどういうニーズを持っているのか、どういうイメージを持っているのかということを、アンケートをしながら実際に把握してみるというのが１番でございます。

それに基づいて２番として「提案を作成する」ということで、こういうふうにやっていったらいいんじゃないかという案を作りましたら、３番として「コンサルティング・マッチング」ということで、さまざまな主体さんにその情報を提供しながら、一緒にこういうことをやっていったらどうでしょうかということを提案する、働き掛けるというものの事業でございます。

めくっていただきまして５ページ目がⅡ-1 ということで、「講演会・交流会」でございます。こちらにつきましては先ほどからお話がありますけれども、それぞれの自治体さん、いろいろな団体さんでみんなに意識啓発をしたいだとかマッチングをさせてあげたいというような要望もありますし、それぞれの団体さんで困られていること、いろいろ学びたいことが出てきているかと思います。

ただ取り組み上の課題としまして、誰を呼んだらいいかわからない、つてがないとか、資金がない、人手がない、狭い地域では人が集まるか心配だし交流も進むかどうかわからない、隣の都市でもやったしどうしようかというような悩みもあるかと思います。

そこで仮想中間支援組織として、圏域一帯として何か事業をしようということで二つ挙げております。一つが講演会の開催でございます。意識の啓発と各種活動団体の課題を解決していきたいというものの一つで、本日５時からですけれどもまた朝廣さんに講演していただいて、圏域内の市民の方、活動団体の方にそういったお話を聞いて解決のきっかけにしていただきたいというものでございます。なお、この講演会につきましては来年２月ごろにももう一度開きたいと考えております。

そして２番目としまして、そういった講演会だけでなくて各種活動団体の交流促進、マッチングの場として交流会を開催したいと思っております。今日も講演会の後、交流会ということで各種活動団体さんが交流できる場を中間支援組織として設けます。

中間支援組織では、さまざまな今、NPO さんが入っておりますけれども、その NPO さんが持たれているネットワークを生かして、宣伝活動なりを今、しているところでございます。

最後、６ページになりますけれどもⅡ-2 ということで、「インターネット相談事業」というものを挙げております。こちらにつきましては一般の市民の方、活動されている方、さまざまな方が活動する中での相談事、あとはいろいろなアイデアといったようなものを持たれているかと思いますが、こちらについて受け口として今、大きく二つあるのかなと感じております。

一つは両県とか市町村の窓口とか NPO の支援センターといったものがあるかと思います。ただ、こちらにつきましては個別に対応していくというものでございますし、蓄積がないとともに、１人の方に相談するので複数の回答を得られないという客観性も少し足りない部分があるのを感じております。

そして右側のインターネット上の相談窓口、こちらの方につきましても、全国的にさまざまな相談窓口はありますけれども、やはり限定された人に対する専門性の高い相談システムが多くありますので、なかなか地域の実情を加味した回答が得られにくいという問題がございます。

ですので、仮想中間支援組織としてはパイロット事業として、一般的な相談に対して相互に教え合うシステムを構築しようと。これをインターネット上で作りましょうということでございます。

こちらを広く一般の方が相談できるようにということと、相互に教え合うというものでシステムを構築していきたい。その際には中間支援組織の方々、今入っている NPO の方々のネットワークを生かして周知ですとか、その回答の協力依頼などをどんどん広げていくということを考えております。そして専門的な知識の相談の必要がある場合は、既存のシステムの方を紹介していくとか連携していくということで進めたいと思っております。

細かいスケジュールについては参考資料 7-3 で記しているんですけれども、なかなか期日が迫っており、この事業の方を着実に進めているところでございます。

参考資料 7-4 では、こちらの各事業がどういった論点で調査を進めていくのか、カバーするのかということも整理しております。説明は省かせていただきます。

ちょっと駆け足でパイロット事業の内容を説明させていただきました。続きまして資料７になります。これまでの活動を通して見えてきた中間支援組織の課題を、こちらの方でざっくりとですが整理させていただきました。

今から説明させていただくのは関係者の中でもまだ協議の済んでいないもので、こちらからの案としてまとめたものです。最後の委員会までに中間支援組織として理事会、事務局の方々の意見を聞きながらまとめていきたいというものでございます。

まず１ページの１番としまして、理事会について感じている課題を挙げさせていただきました。大きく３点ございます。１点目は、出席者が少ないというものがあります。理事会、メンバーが 31 名おられるんですけれども、準備会では 16 名、１回目では８名、２回目では 11 名ということで参加者が少なかったというものでございます。

そして２番目としまして、活発な意見交換の場となっていないというものがございます。こちらは理事会を提案・アドバイス機関ということで最初の準備会の段階で提案して、また確認していただいたところでございます。ただ理事会ではあまり意見が出ず、全理事の意向を正確に把握しきれていないという問題があります。

そして人数が多いですので、こういった意見交換はメーリングリストを使ってやりたいということでご提案がありましたので、そういったメーリング

リストを設けましたが、なかなか活用されておらず事務局からの一方的な連絡で使われているに過ぎないという問題がございます。

ちょっと考えてみますと、今回のように事業の企画・実施という段階では理事会を提案・アドバイス機関として位置付けても、やはり活発な議論とか達成はなかなか期待できないという限界を感じております。ですので、理事会につきましては予算とか事業計画の大きな方向性と、こういったところを承認する機関として機能を限定した方がいいのではないかと感じております。

これはまだ仮説ですので今後、理事の皆さんにアンケートやヒアリングを行いながら、理事会としてどういう機能を持つべきかを整理していきたいと考えております。

そして２番目は事務局の課題です。こちらも整理中ですが、まず一つ目としまして中間支援組織における地元外スタッフのかかわり方にジレンマが生じていると書かせていただきました。

これは私ども地元外スタッフとして入っているんですが、なかなか地域の実情もわからない。あとはさまざまな NPO さんが活動されているという方がみえられますので、そういった方々を立てる意味で、少し後ろからサポートする意味で最初にかかわっていったんですが、ただ、それでは物事が進んでいかない。時間がない中では案を示させないといけないという議論がありました。そういったご意見がありましたので、それを受けてこちらの方で率先して案を作って提示したんですが、今度は逆に皆さんのご意向、状況をきちんと把握していなかったので混乱を招いたということがございます。そういったデメリットがいろいろありました。

ただ一方で地元のスタッフの方々というのは、やはり地域の活動に軸足を置かれている傾向がございます。そして周りからもそのように見られております。そういった面から見ますと、地域外のスタッフが客観的な立場でコーディネートをする必要性は一定程度あるのかと感じております。

そこで、先ほどジレンマと申しましたけれどもそういったことをするにしても、やはり事前準備としてきちんとしっかり時間を取って、事情を理解しながら信頼感を醸成するということがかなり必要ではないかと感じております。

こちらは私どもの方で今、書いているだけですので、地元のスタッフの方々にも意見を聞きながら、これからどうやって作っていくべきかということを最終委員会までに取りまとめていきたいと感じております。

そして次の課題ですけれども、次は地元スタッフの方々が活動を行う際にどうしても既存の活動の方に軸足を置かれる傾向があるということがありますが、その一方で地元スタッフさんのネットワークは、これはかけがえのない資源です。こちらのネットワークがかなり事業を行う面でも活用されてお

りますので、これから事務局としていろいろ事業を動かしていく際には、このネットワークは積極的に活用させていただかなければならないと感じております。

新たな取り組みとして、やはりこういった地元スタッフさんが持たれている既存のネットワークをそれぞれ結んでいくということと、新たにネットワークを新しく作るということが重要かと感じておりますので、このあたりの作り方についてこれから地元スタッフさんにお話をしながら作りたいと感じております。

そして最後になりますけれども、地元スタッフとしてこれからこういった中間支援組織の活動をする際に、参加意欲は高まらないとなかなかこういうものに参加できないというご意見も伺っております。参加意欲が高まるというこの必要性ですが、やはり中間支援組織ということで影から支える組織になってしまいますので、こういった組織がこれからうまく動いていくためにはプライドなりを持たないといけない。そういった意味でも自主事業を実施していったり、他の自治体とか活動団体さんに提言していくという一歩前に出るような活動が必要不可欠ではないかと感じております。ですので、これからこういったことをパイロット事業の中でもやっていきたいと思っております。

以上が現場での検証のご説明になります。そして最後の資料８というのが、今度はお話が変わりまして事例検証になります。こちらにつきましては現場検証で取り組めない先進的な取り組みとか環境がちょっと違うものということで、こちらの方で４カ所にヒアリングをしてまいりましたので簡単にご報告させていただきます。

４団体さんというのは、一つは NPO 法人 NPO サポートセンターということで、こちらは全国的に中間支援組織を支援する組織でございまして、政策提案事業とか人材育成事業に力を入れられているところです。２番目は財団法人日本グラウンドワーク協会さん。こちらはご存じの通り、イギリスで成立したグラウンドワークを参考にして設立されたパートナーシップを組んで事業をやられているところでございます。３番目は NPO 法人 NPO 支援機構すぎなみということで、こちらは東京都の杉並区で NPO 活動をする人、12 人が集まって立ち上げた中間支援組織でございます。区の職員は全く入っていないという民間だけで立ち上げた組織であります。こちらが今、区から NPO 支援センターの運営を任されて、いろいろな人材育成なり啓発活動をしております。そして４番目はみなとネットということで、これは東京都の港区内に立地する企業の社会貢献担当の方々が集まるネットワークで、特に組織としてあるわけではなくて任意の団体としてあります。こちらにつきましては会費がないとか会則がない、代表者がいないということで持ち回りでやっているんですけれども、かなり事業がうまく動いているということでヒアリングを

させていただきました。

この４者に対するヒアリングをしまして２ページ以降で整理させていただいておりますので、ご説明させていただきます。

まず１番としまして、中間支援組織が担うべき機能とか活動のイメージについて整理いたしました。

１番目の普及啓発ですけれども、こちらは単にイベントをやればいいというわけではなくて、こういうイベントをやりませんかということを行政とかいろいろな団体さんに働き掛けていくことも重要であると。そして、単にボランティアとしてそういった啓発事業をするのではなくて、参加費を取ったり、自立したイベントとしてやっていくべきだということでございます。

２番目の人材育成につきましては、こちらはどこの団体さんもそうですが人の育成を重視しているというものでございます。特に興味深いお話は、中間支援組織になるとさらにその内部でも人を育てなければならないということで、重要性がかなり強く言われておりました。

そして③は連携・マッチングということで、これは前回の委員会でもさまざまなご意見を頂きましたが、市民と行政の間とか、地域の中と外の間、あとは NPO と企業をマッチングするということでこの中間支援組織の重要性がかなり言われておりました。

そして④が政策提案でございます。普段影で活動している中間支援組織ということですが、存在意義とかプライドが持てるようこういった活動が必要であるということです。こういった活動をすることで調査費などがつくということで、組織運営にも役立つのでぜひこういうことをやっていくべきだとさまざまな方が言われておりました。

そして⑥、集金・分配ということで、こちらはアイデアとして中間支援組織がお金を集めてさまざまな NPO に分配することも考えられるのではないかということで言っておりましたが、これはなかなか難しいと。

そして⑦の事業全般ですけれども、行政から仕事をもらうと金の切れ目が縁の切れ目になるといいますが、そういったことになりがちなので、今回この事業をやるときもその事業の間に人を育てるとか、具体的な事業を育てるということが重要なんだと言われております。

ただ、それぞれの方々をマッチングするだけではなくて、自主的に何かをやっていく。そういうことをやりながら信頼を勝ち取っていく必要があるということで強く言われておりました。

続きまして２番、３ページですけれども、中間支援組織の構築、組織の運営に関する事項でございます。

まず人材につきまして、支援組織という名前でありながらもやはりトップの人柄とか能力はかなり重要視されるということです。そして行政にもこういった活動を認めてもらうようなキーパーソンが必要だということでござい

ました。

先ほどの杉並の例でもありましたが、条件がそろえば地域内の NPO の方だけでも集まってこういった中間支援組織はできるんだということでアイデアを頂きました。

②ですけれども意思決定につきましても、理事会の中で信頼感がまず育っていないといけないということで、時間がないとなかなかそういう関係が築けていけないので、まず時間がかかるということを言われておりました。

④に求められる能力ということで、コーディネート力、提案能力、ネットワークだとかフットワークの軽さ、さまざまな能力が求められておりました。

⑦ですけれども組織の立ち上げということで、やはり５年ぐらいのスパンはないとなかなかこういう中間支援組織は育っていかないんだと。行政が面倒を見ていく必要もありますねということで言われました。

そして最後に３番その他ということで、今回こちらの事業を進めていく上でアドバイスをちょっと頂いたものです。

①として行政の意識がございます。こちらについては今、行政が持っている事業を NPO さんに渡すだけのことでは責任ある NPO が育っていかないので何とかすべきじゃないかということを言われておりました。

そして③その他ですけれども、今回この地域でということでお話をしたらこういうアドバイスを頂いたんです。やはり地域が広がっていきますと、もとの地域の意識だとか事業の質も下がっていくというジレンマも生じる恐れがあるだろうということで、ちょっと配慮すべきだというご指摘を受けました。

そして事業の関係者が多くなりますと、どうしても意思疎通や意思決定が難しくなるということがあります。さらに、遠慮がなくなって自己主張が多くなるような場合とか、逆に譲りあって事業は進まないということがありますので、こちらについても配慮して事業を進めたらどうでしょうかというアドバイスも頂きました。以上で説明を終わらせていただきます。

岡崎委員長　ありがとうございました。以上についてご質問、ご意見はありますか。

鈴木委員　最後のところで掲げたのは、中間支援組織の課題というか NPO さんの課題みたいなところがかなり混じっているような気がするんです。

例えば、今日朝廣さんにお話しいただいた、この燈花会の NPO というのはまさしく中間支援組織として、従来ではなかった団体さんと市民を一緒に動かすと。まずその団体と市民の間に入って、あるいは行政との間に入って、それから団体と団体に加入していない企業さんと我々が立って、こんな燈花会というイベントを成功に導いている。

事業主体でもあるんですけど、でも実質上そこのコーディネーションは中間支援組織としても機能しているんじゃないかなとお話を伺いながら思ったんですけれども、そういう視点に立つと、だから中間支援組織の活動に対す

る参加意欲を高めるとかという発想じゃなくて、たぶんそこで何かが実現する、その組織があることによって従来では連携できなかった何かが起きる部分に中間支援組織は必要であって、それをやっていくことによって、その中間支援組織の価値が高まるという関係だと思うんです。

だから中間支援組織自体が自主事業とか政策提言という、そういう機能を持っているのは、何か相談があったときにそういうのを持っているのは必要だと思いますけれども、そっちが先行するということじゃないような気がする。

例えばこの地域では、鳥取と島根という県境を挟んだ地域をつなぐのに何かやらなくちゃいけないということで今、一生懸命検討しながら活動しているわけですから、そこのそれぞれの具体の共同でできる事業をうまく進める潤滑油というか。その中での提案であれば、それにこうしたいという提案であればいいと思うんです。

そういう意味ではこのパイロット事業というのは今、一緒に両方でやろう。既に立ち上がったポータルをよりよくすることに力を割いているわけです。あるいは、そのアンテナショップみたいなものを作るときの知恵出しをするということ。それがやっぱり中間支援組織の活動だという気がするんです。

だから、なかなかまだ途中だということなのであれだと思うんですけども、ちょっとそこら辺の視点の揺れがこの資料の中で感じられるので、もう一度整理していただきたいと思います。

事務局　今の点に関して一言だけよろしいですか。

そこもちょっと悩み深いところも実はあって、というのはヒアリングをしたときに NPO サポートセンターのところ、要は NPO 支援センターを支援している組織の中間支援組織を支援しているような組織の方のヒアリングの中で、なかなか中間支援組織という影で支えるというだけだと、モチベーションをやっぱり維持しにくいというのはあるらしくて、その中では自主事業というべきものなのかどうかわかりませんが、やっぱり中間支援組織としていろいろな事業にかかわっていろいろな支援というような動きを本来業務としてたぶんやっていると、その中でいろいろ提言できるような内容も見えてくる部分があるんだと思うんです。

その中でそれを提言する、自らも提言する、いろいろなところに提言していく。特にたぶん行政に対してというのが多いんだと思うんですけれども、そういう提言するということを自分たち自らがやると。どこかを支援するんじゃなくて自分たちが自ら何かすることによって、実際中間支援組織に携わっている人たちのモチベーションを高めることもできるというお話もあって、そういうのもやっぱり中間支援組織の機能としては、一つの軸として考えていく必要があるんじゃないかという問題意識を持っていまして、それでちょっと課題にも書かせていただいたというところでもあります。

鈴木委員　　やっちゃいけないとは思わないんですけれども、例えばこの地域で中間支援組織という言葉を最初に聞かれた方が、そういう提案事業を聞くと、そういうことをするところなんだろうと思っちゃう可能性があると思いまして、少なくともそれは劣後なんだということをはっきりした方がいいのかなと思っています。

だから、そういう新しい何か旗振るところが出てきて、両県をまたがり、こうしたらいいよと間に立ってやってくれる人というのではないと思うんです。そんな感じです。

だから別に、おっしゃることは非常によくわかるし、その能力がないと実際に相談が持ち込まれたときに、何とかしてよといっても何ともできない組織であると困りますので、能力は必要だと思います。

事務局　　あともう一つ追加させていただきたいと思うのは、今、こういった中間支援組織を仮想でやっておりますけれども、来年度以降、どう自活しながらやっていくかということが重要なテーマになっておりますので、自分たちで事業を組んでみるということで、強調して今日も発言させていただきました。もちろんそれは後で、まずは連携をということだと思っておりますので、ちょっと表現を改めさせていただきたいと思います。

鈴木委員　　そこはストレートに、自立する必要があるということを書いていただいた方が。そのために自主事業をやる場合もあるという。大事なのは自主事業をやることではなくて、自立することの方がいいような気がしますけどね、明らかに。

岡崎委員長　　この委員の皆さんの中でも、例えば理事会なんかにお出になった方もいらっしゃるかと思うんですが、そのあたりのご感想も含めて、この資料７にあります「ここでの中間支援組織の課題」というところで、これはまだ検討中ですのでいろいろご意見を頂ければと思っております。

はい、どうぞ。

細羽委員　　では、資料７に関連してちょっと意見を述べさせていただきます。

私も仮想中間支援組織のメンバーということで、会議の方に出席させていただいております。ここに書いてある課題というのは、いわば当然のことなのかなと思います。

といいますのは今回、仮想の中間支援組織ということで、そもそものメンバーの方が自分たちのテーマとかミッションみたいなところを十分理解されないままに出ておられる。ですから当然その温度差とかあって、なかなかうまくまとまっていかない、進んでいかないというのはある意味当然だと思うんです。

ですから、ここでは「中間支援組織の課題」とは書いてありますが、これは普遍的なものということではなくて、むしろ今回のパイロット事業といいますか、この仮想の中間支援組織での課題というか問題点なんだと思うんで

す。

ですから、そもそもはやっぱりこういった課題を報告するには、まずミッションは何かということを明らかにして、その上でそれにふさわしいメンバーを集めるというところがスタート地点ではないかと思います。

ですから中間支援組織といっても、そのテーマとかミッションによって当然その形態とか、その組織の在り方はいろいろな形があるんだと思うんです。ですから、ちょっとその辺を、例えば今回は広域連携とか、そういったところの中での中間支援組織の在り方という中で課題の整理が必要なのではないかなと思います。

平田委員　よろしいですか。

岡崎委員長　はい、どうぞ。

平田委員　整備局の方が今日来ていらっしゃるので、特に私が申すまでもないんですけど、私が所属しております「中国・みちづくり女性会議」というのがあるんですけど、今、考えてみますとそれがまさに中間支援組織ではないかという気がしております。

それは中国５県でそれぞれが活動している女性を結ぶ会でして、テーマは道について述べるんですけど、道のみならず地域づくりとかそういうことにかかわっている女性をつなぐんですね。そして年に１回ずつ各県持ち回りでフォーラムがあります。そしてその後で、松江国道ですとか三次工事事務所とかいろいろな行政の方と一献交えるとか。そのときに本当にフォーラムでは達しえなかった議論になることもありますし、そうやって顔つなぎをさせていただいたのが非常に、その次の年に自分自身の活動をするときに役に立つことが多々ございます。

そして今、ご説明いただいたのはとても早口ですよね。訳がわからないのにもうどんどん進まれて、この中間支援組織を立ち上げるというのがまさにそれに象徴されているようで、そんなに急いでこれは立ち上がらないものではないかと思います。

その中国・みちづくり女性会議というのも実はもう５年目、６年目ぐらいになっているんですね。本当に最初に顔を出させていただいたときは「これは何の会だ」という状態でした。ですけど年に１度、あるいは２度出させていただいているうちに徐々にプロフィールというか、だんだんほかの方もわかってきたし、会そのものの雰囲気もつかめてきてようやく、「お願いします」とか「やってみなさいよ」とか、いろいろな信頼関係が生まれてきたんです。

中間支援組織というのはそうやって急いでつくるものでもなく、徐々に少しずつ人間関係を構築しながらできるものではないかと思うんです。そして、今、私どもはそうやって中国５県をいろいろつないでいただいているんですけど、中でも鳥取・島根を今つなぐことを考えていますので、もっと見やす

いというか、山越えしなくてもいい楽な方法なので、うまくすんなりいくんじゃないかとな思っております。以上です。

田中委員　追加でちょっと確認ですけども、さっき毎熊さんがおっしゃったことは全くその通りだと思いまして、僕も実はこの資料を読んで、ざざっと目を通したんです。理事会 31 名の構成の中で、16 名、８名、11 名と。どれを見ても半数にも満たない理事会です。これはやっぱり理事会の目的が十分ご理解されていないのでないかな。

やはり残念なことに１回目に出て、何だ、つならんじゃないかという感じで、２回、３回に及んだんじゃないかなと。先ほど平田さんがおっしゃった拙速という言葉がこの辺に当てはまるんじゃないか。もう少しじっくりと取り掛かるべきではないかな。

ここの中で、結論付けで理事会でこういう重大なものを、極端な言い方をすれば、もっと重大なテーマを出してはいけないので、せいぜいその体系ぐらいでいいんじゃないかというようなことも結んでいらっしゃいますけど、もうちょっとこの辺はきちんと目的、事業を認識していただいてからやっぱりやるべきじゃないかなという感じを思いました。

岡崎委員長　そのあたりは何か、事務局からちょっと。

事務局　非常に厳しいご指摘だと思っていまして、そういう意味では我々の予算の作り方の根本的な問題でもありまして、本来、それは確かにほかのヒアリングでも実はご指摘を受けて、そんなものに実質半年ですから、単年度調査で半年でやるんですか。そんなものできるわけないです、というようなご指摘も受けているところでして、本来やっぱりじっくり時間をかけてやらなきゃいけないものなんだろうと思っております。

したがって今回やっている部分というのは、その最初の背中を押している部分だけだと、たぶんならざるを得ないんだと思うんです、位置付けとしては。ただちょっとその中で、我々としてはある程度半年の中で何らかの答えも出さなきゃいけないところもあるあせりもあって、今のような厳しいご指摘になっているんだろうと思います。

これからの大きなテーマでもあるんですが、今後の継続性をどうしていくかという部分は非常に大事になってくると思っていて、まさに我々がお金を出す調査機関としてやるのはある程度やっぱり限定されているのはちょっと致し方ないところになってくるので、その後どういうふうにしてこれをうまく、先ほどちょっと自立というお話も出ていましたけども、どのようにしてうまく回していくようにできるのかというところを、少なくともそこは何とかこの半年の間で答えを出さないといけないと思っています。それが、うまく今、地元で特にかかわっている方々に納得してもらえるような答えを出して、みんなでそれに向かっていけるようなものを作り上げていかないといけ

ないとも感じておりました。

本当に難しい課題で、できるかどうかというのは正直、自信が完全にあるわけではないんですけれども、それに向けて努力したいと思っております。

渡部委員　すみません。蒸し返すようでなんですけど、21 日に全体の資料を送っていただいて、20 日でしたか。手元に届きまして、すごい分厚いの、恐れをなして見れば、目を通しても理解できないような内容がほとんどで、それで明くる日、21 日に地方紙の経済面でしたか。今日の会議のことが記事になっておりまして、全国唯一のモデル地区か何かという表現もしてありまして、ちょっと、さっき細羽さんが言われたように、テーマごとにそのテーマにふさわしい人選というかそういうので委員が構成されていたら、もっと違う発展性があったかもしれませんけど､私はこの 20 日前に送られた資料を見た段階で、とても私の対応しきれる委員会じゃないなと、それだけすごく強く感じました。

それでさっきも言われましたけど、蒸し返すようで悪いんですけど、とても半年で、私たちが出るのは４回の会議ですと最初委嘱されたときから言われておりまして、４回や半年で次の年に向けてこれからの日本を考える唯一のモデル地区のようなことが可能だろうかと、そういう疑問を持って今日は審議しております。

岡崎委員長　はい、取りあえずいろいろ聞きましょう。

毎熊委員　どこかでもしゃべったような気がするんですけど、理事会だったか何だか。やっぱり、ずっとこれを最初から、この委員会では二つ、ちょっとこんがらがるような使命を担わされているような気がしていて、一つは、これは単純にいえば実験なんです。あくまでも実験で、その顧客というか、その成果の顧客は国の審議会なんですね。この文書を理解しているということが基本的なその成果の帰属先で、そのためにやると。

だから実際この３月で中間支援組織がなくなっちゃうと、基本的には関係ないんです。その実験の中で今後誰かが中間支援でやろうといったときの何かの参考になることができればいいというのが１点目です。

２点目としては、それでもやっぱりやるからには、あるいは観光ということを一つの目玉としてやるからには、この島根・鳥取に観光としての何か成果を残しておこうという、もう一つがあるわけです。

後者の方でいくとさっきから出ている、この中間支援組織を４月以降取りあえず興していって、自立していくかというのはものすごく課題になっていくわけです。あるいは、ここで出てきている理事会の課題でいったら今の現理事会が実際機能していない。これはいかんと。これを母体にして来年４月以降やっていくには、どうも期待できないということで課題になるはずなんです。

仮に、最初に言った目的でいくと、最初にご指摘があったように、理事会

がどうのこうのでなくあくまで実験なので、これは普遍化できる話じゃないので、あくまで今できて実験場で作っている理事会なので、このような状況はある意味しょうがない。ですからそこを、二つの目的をもう少し整理して議論した方が、今回はこの課題の整備を。そこが混在して出てきているような気がするんです。

だから、例えば、まさに実験ということだけを強調するのであれば、理事会とか事務局、あるいは地元外スタッフとかいうことはあまり問題じゃなくて、むしろ普遍化できるような部分に焦点を当てて課題を抽出していくと。

それは、ひょっとしたら例えば実際の事業を行って行く中で、今、具体的な NPO さんが実際にやられている、例えばフリーペーパーの役割分担みたいなもの、これはどうやってやるんだろうと思うんですけど、実践に誰かがいずれこれをやろうとしたときにはそういうことが必要になってくるので、そのときの本当に細かな話があるんです。そういうのを課題として拾い上げていくことはたぶん必要になるんでしょうけど、現時点ではまだこんがらがっているので、そこを何とか、どっちかに重きを置けとかいう話ではないのかもしれませんが、取りあえず交通整理というかご提案というものだけ、すみません、失礼しました。

岡崎委員長　ありがとうございました。

毎熊先生のおっしゃる通り、一つ、全国的な意味で、これは初めてのというんですか、モデル事業ということでもあるんですが、それ以上に今度、国土総合開発計画から国土形成計画というふうに、戦後続いてきた国土政策自体を根本から変えようという、国全体でも大きな転換点なんです。

そういう全体も変わっているところで、しかもその中でかなり中核的な「新たな公」という、一番難しいところを担っているモデル事業になるから、問題としては非常に大きいところがどんど出てきて、日本全体でもまだなかなか議論は煮詰まっていないところをモデルでやろうというんだから余計大変なことなんです。

毎熊先生はおっしゃる通り、そういう新しい国土計画に向けてここでいろいろ事業をやることが、こういう問題があるということがたくさん出てきても私はいいんだと思っております。

それからもう一つはせっかくやるんだから、地元で何か仮想でままごとでやるんじゃなくて、やっぱり地元のためになるところがうまくくみ上げられれば、それも非常に大きな一つの成果ではないかということで、事務局としてはそのあたりをドッキングさせながら何とかもう一つ前に進まないかなと、後ろの方に具体的な資料をたくさん入れながら提起していただいているということではなかろうかと思うんです。

そうは言っても地元では、問題あるぞということがあるわけなんですが。

友森委員　松江市でございます。大変、この事業目的の本質論のところを論議してお

（青木代理）　られる中で恐縮なんですけれども、ちょっと細かい部分で１点ご質問というか、お願いをしておきたいと思っているんです。

先ほどございました、これからのモデル事業の中のことで松江市としましてお願いしておきたい、パイロット事業ですけれど、内容が理事会でも審議されているということで今回ご提案いただいているんですけれども、前回の委員会のときに、このアンテナショップのことです。非常に小さいことですけど、アンテナショップにつきまして、前回の委員会の今後のパイロット事業の見込み案の状況の中に、まず一つにはそういったアンテナショップを経由して出たアンケート結果などを地域に共通に提供していこうと、情報共有の一つとして持っていく。

もう１点としましては、そのアンテナショップ自体について圏域を超えた連携を検討していきたいということを今、一つのパイロット事業の調査対象としてやっていこうとご提案いただいていたところで、ぜひ、先ほどもございましたが、あくまでこれはパイロットなんですけれども、できるものは継承していけたらと、このように思って、成果物として生かしていきたいと思っているところです。

つきましては、今現在、中海４市で連携してこのアンテナショップにつきましてどのように活用されてやっていったらいいかということの本質的な検討をやっているところで、４市に一応提案しているところでございます。まさにこの、これからアンテナショップをどのように位置付けていったらいいか。そしてその運用、在り方です。必要な経費などもどういうふうに考えていったらいいかということを、慎重にこれから検討していきたいと思っております。今回の中で調査していただきまして、この一部になるとは思いますけども、我々にとっては大変大切な調査と、このように思っておりまして、ぜひ、この圏域を超えてのアンテナショップの連携というような在り方を、今後の観光事業の中に生かしていく上で切実な問題として考えております。そういった成果を出していただきましたら、これを引き継いでいきたいと思っております。ぜひ、その辺のご検証をよろしくパイロット事業の中でやっていただきたいと思っておりますので、お願いいたします。

岡崎委員長　それはこの地域で統一的なアンテナショップを作ろうというものですか。それともどこか大阪か、東京に出そうということですか。

友森委員（青木代理）　その辺も含めまして、もちろん都市部の大阪、そして東京。現在、島根県様の方で東京の日本橋のところにございます。実際、その中海４市（安来市、米子市、境港市）と一緒になってそういったものにどのように連携していったらいいか。そして島根県さんとの連携もございますけど、まさにその辺が共同でやっていける姿を摸索しているところで、そういった連携のポイントを、このパイロット事業の検証項目の一つで、前回の委員会の方でもご提案いただいていたものですから、ぜひ継続して形あるものをご提案いただけた

ら、それを参考にさせていただいて生かしていきたいと思っているところです。

大変、一部の小さい話になりますけども、観光として生かしていきたい、引き継いでいきたいと思っておりますので、追加としていただけたらと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

鈴木委員　今のお話は前回理事会でご発言させていただいたのに反映されていないので、ここで言おうかと思っていたんですけれど、ぜひ理事会で検討していただければと。

岡崎委員長　アンテナショップはちょっとどこ、この資料に入っていましたね。

友森委員（青木代理）　今、鈴木委員がおっしゃいましたけど、情報の共有化なりフィードバックのところは残っているんですけど、やっぱりその辺も、圏域を超えた連携を検討と、そういうところをお願いしたいという。

事務局　ちょっと１点、すみません。その辺は資料６で、確かに上手く表現できなかったという感じではあるんですが、参考資料 7-2 で、そのアンテナショップというか。アンテナショップ以外にも民間で、東京とかにいろいろ店舗を持っているような居酒屋とかもあるということも含めて、現状をちょっと整理させていただいたんです。

実はその欄外の下のところで、例えば愛媛と香川で両県が共同で、「香川・愛媛せとうち旬彩館」というようなものもやっておられるという、まさにそういう連携でアンテナショップをやるということのモデル的な部分だと思っていて、そこも調査しようと思っておりまして、そこは明確に資料６の中に書いていなかったのかなと思うんですけれども、決してそれを対象外にしているというわけではなく、当然連携して当たっていくというのは中間支援組織の中でも一番核になる、いろいろな主体の連携が核になる事業だと思っておりますので、ということです。

友森委員（青木代理）　よろしくお願いします。

岡崎委員長　東北三県では、天神のところに東北三県でアンテナショップを。これは非常にわかりやすい広域で取り組む新しい例だと思います。ぜひ、それじゃ、これをパイロット事業でもご検討いただければいいと思います。

松村委員　私の方は、いろいろパイロット事業の具体的な取り組みについて、実際参加していないものですから、なかなか今、そういう皆さん方の議論についていけないかなという感じなんですけど、その中にちょっと具体的に、資料６のパイロット事業の中身のところを確認させていただきたいんですけども、６ページのところでインターネットの相談事業というのが紹介されております。その中で、上の現状の中で、全国的には限定された圏内という専門性の高い相談システムが存在するという話なんですけど、それが具体的にどういうものかというご紹介をいただきたいと。

その上で今回、ここで、その専門性の高い相談システム等をいろいろ構築していこうというかたちで、具体的にどういうものを考えていらっしゃるか。特に具体的な話をお教えいただくといいなという、よろしくお願いします。

事務局　まず１点目の、全国的には限定された人に対する専門性の高い相談システムということですけども、これは具体的なイメージしておりますものは、松江の方にあります NPO のまちづくりビジネス支援ネットワークさんと、今回我々の中間支援組織の事務局の一員を担ってもらっているんですけども、そちらの方が、過去にシステムを立ち上げられたものを今回活用するということで、この中に今、動いている実際のシステム、インターネット上のホームページであるんですけども、例えば、徳島県の葉っぱビジネスで有名な上勝町ですとか。そういったところの全国著名な方々の参考アドバイスが聞けるというシステムが今あるということでございます。

そういう既存システムということで、それはいわゆる会員制ということになっておりますので、もうちょっとハードルを下げた意味でオープンな場ということで、総合相談であったり、一般の書き込みができるとか、そういったところで今回、新たに二段構えで作っていこうということになっております。

松村委員　はい、わかりました。

岡崎委員長　ほかはよろしゅうございますでしょうか。

事例調査という、取りあえず４団体ですかね、今走っていただいていますが、これはだいたいこのレベルであれでしょうか。もうちょっと、何か海外という話もありましたけど。

事務局　事例の方はもうちょっと増やします。海外についてはたぶん文献で調べるかたちになるかと思っております。実際に聞いてとかいうことじゃなく、たぶん文献で調べるというかたちになると。国内の事例は、またもうちょっと増やして順次やっていきたいと思っています。

岡崎委員長　何か今回は、お調べいただいたのが、こちらで想定しているような具体的なエリアを対象とした、しかもそこの地域活性化といいますか、新しいそういう観光振興等に資するような事業を対象としているものと若干性格が違うような気がするんです。何か今回モデルにしているようなので取り組んでいるものが調査対象としてあれば、こちらの皆さんもイメージが沸きやすくなるんじゃないかと思うんです。私もちょっと今、よく思い当たらないんですが、そのあたりで何か、今後の調査予定で対象としている予定組織はありますか。

事務局　資料８では４団体ご説明させていただきました。

すぎなみの事例は確かに杉並区という、狭いエリアですけども地域に対して愛着を持つ人が活動するというものですが、もう少し広域で活動する方、そういった中間支援組織を探して今、いるところです。県レベルになるのか

県をまたがるのか、ちょっとヒアリングをさせていただきたいと考えております。

そしてその欄の下に米印で書いておりますけれども、まだまだ事例が足りないとこちらも思っておりますので、特に線を引っ張っております大阪の方にあります地域情報支援ネット。こちらは自治会の活動を支える NPO さんとか、そういった変わった活動をされている方もみえられますので、もう少し事例は膨らませて、しかもこの地域になるべく使えるようなものを増やしていきたいと思っております。

朝廣氏　ちょっと聞かせていただいていて、事例の一つとしてご紹介させていただければと思ったのが、「奈良 2010 年塾」とお手元にあると思うんです。実はこれは、私は燈花会をやっていましたが、ほかに奈良でいくつか祭りをやっているメンバーが、人材がなかなか育ってこないと。自分たちでそういうイベントを、もっと立ち上げられるぐらいの人をつくろうということで、NPO の奈良元気もんプロジェクト推進会議というのを作ったんですが、そこが県から委託を受けて奈良 2010 年塾を運営しているんです。

これは人材を、年にカリキュラムを 40 コマぐらい、毎週土曜日はつぶれるんですけども、毎年塾生を募集して 40 人ぐらいが入って、現在３期生が活動しています。

例えば、NPO がやっているいろいろな町の祭りに塾生が行って手伝ったり、人がいなくて困っている祭りを一緒に運営したり。それをカリキュラムの中に入れて人材育成ということで、勉強しながらよそのお祭りを手伝ったり、あるいは県内の NPO をつなぐ祭りもしたり。そういうちょっと中間支援組織的な役割かなと。

あるいは県から委託されているものなので、県の事業にも参加したりということで、自分たちが勉強しながらいろいろな NPO を手伝っている塾なんです。そういうことで参考になるようなら。

さっき、よそ者が言うのもあれですけど、聞いていて、たぶんどの団体も忙しいから自分たちのことをするのが一生懸命で、こういう組織を、自主事業を行うと、「ちょっとそれは勘弁してくれ」と言うんじゃないかなと、客観的によそから見て。自分のところにどんなメリットがあるのかということがわからないと、なかなか参加しようとは思わないんじゃないかと。

取りあえずは、もし、私がその１団体の１人だとすると、パイロット事業を一つずつやっていく。それからやりましょう、それから広げていきましょうというようなことだと、参加しやすいのかなということをちょっと感じました。失礼しました。

岡崎委員長　ありがとうございます。

これは県が主体でやっていらっしゃるんですか。2010 年塾というのは？

朝廣氏　県は 2010 年に遷都 1300 年記念事業を抱えているので、そこのボランティ

アを養成しようと思っているんですけれども、私たちは、それはそれとしてそれ以降も奈良のまちをつくっていける人材をつくっていこうと。私たちの仲間をつくっていこうと、そういう塾です。

ここに今、言った運営する組織が、団体からじゃなくて個人なんです。だから、団体というとどうしてもしがらみがあり、団体で何であの人が出ているんだとかいろいろなことがあるので、そういうことを立ち上げた個々人が参加してやっていると。だから余計なしがらみとか団体を後ろに背負ってきているんじゃないから、非常に運営としてはやりやすいというところです。

岡崎委員長　こういうのも人材育成という意味では非常に重要ですね。島根・鳥取にはこういう仕組みはないんでしょうかね。

毎熊委員　いろいろやっています。

岡崎委員長　やっていらっしゃる。

ほか、何か。

石村委員　大山王国の石村ですけども、今、朝廣さんが言われたように現場に私、いまして、中間支援組織のメンバーでもあり、理事会にも出て、この会にも出ているので、私だけかもしれないですね。一番翻弄させられているところかもしれません。

本当にこの地域は今、注目されているみたいで大変ありがたいんですけども、国交省のほかでも道路局の関係で日本風景街道というような取り組みの調査の場所に入って宣伝されているみたいですけども、その中でも特に、マップに書いてあるこの地域が大変その筋がいいということで、家田先生という有名な先生が、評価をいただいたりということで、そんな会もあったり、この会もあったり。

あと、実は昨日は大山圏域の長期滞在にかかわるうんぬんという、これも国交省の地域整備局、都市･地域整備局かな、という、国交省関係の調整でしょう。三つぐらいありまして、私はそれ全部にかかわっていて毎日会議なんですけども、それは置いておきまして。

僕らが今こうやって取り組んでいまして、やっぱり情報という部門をかなり重視して取り組みをしています。今回、山陰ポータルサイトということがこの中海・宍道湖圏域の協議会の中で始まって、その運営もお手伝いさせてもらって中心にやっているんですけども、こういう取り組みがあるから今回委員の方から、この中間支援組織の調査の地域にもしていただいたんだと思います。

やっていて思うのもやっぱり、これはもしかしたら一つの運動体なんだなという。今まで、この地域の人たちは山陰という認識はあったけども、中海・宍道湖圏域で一つのこのエリアで取り組んだこと、それぞれ今まであったんですけども、こういう大きな運動体として動いたということはなかったと思うんです。

この近年、鳥取･島根は仲良くなりましたので、一緒に手を組んで中海４市も４市市長会みたいな、もしかしたら中海市でも作らん、みたいな雰囲気の発言をする市長さんも中にはいらっしゃるようですけども、そんな動きが出てきていまして、そういったものを僕らは情報発信という部分でホームページで、観光が一番切り口としてわかりやすいので、やってきて運動体。まだまだ動き出して間もないのでなかなか成果はないんですけども、それなりの注目はいただいてきつつあるなというのは感じています。

これまで県境があってどうしても大きな、島根県側と鳥取県側でネットワークがなかったんですけども、今回こういう機会も作ってもらえたり、そういった動きがあったりする中で、日々、週のうち２～３回松江に行くことがあって、松江の NPO の方たちだとか、町づくりをやっている方たちとのつながりができて、それこそ Face To Face のつながりができてきました。

これからは本当にもしかしたら、今までは言葉とかネット上だけで講じていたものが具体的にこれから始まるのかなと。そういう意味ではこういったご調査の対象にしていただいて、大変ありがたいことかなと。

毎熊先生がおっしゃったように、実験という部分と、どうせやるからにはこのまま続けていかなきゃいけないという部分で、実験は実験でいいんですけども、やっぱり僕らはこれから継続してやらないと、３月に終わって「はい、さよなら」というんだったらあまり意味がないので、でもなかなかそのあたりがまだ見えてこなくて、これから、私も中間支援組織のメンバーでもあるので意見を出しながら、それがつながるようなかたちにしたいと思っています。

今日は鳥取県、島根県、それから松江市、米子市の方もおいでになっているので、今後４月以降も、今の引っ掛かっているようなことをちゃんと引き継ぐというのか。この中間支援組織というものを必要だと感じていただいて、どこかの組織の中にでも専任で人をつけるぐらいのところまで持っていっていただければなと。

具体的に言えば、中海・宍道湖・大山圏域の協議会を商工会議所さんと一緒になって組み立てされているんですけども、例えばそこに専任でそういったコーディネートをする人を１人置いて、とか事務方を置いていただいて、今の動きを継続してやっていただけるようになれば本当は理想かなと思います。

そんなことでなかなかまとまらないですけど、やっぱり、せっかくこういうマップができまして、かなり意識が地域の方たちも変わってきましたので、この勢いを一つの運動体にしていけば観光の部分でもかなり活性化してくるだろうと思います。観光を活性化すれば、アンテナショップという話もありましたけども、そういった物産関係にもつながってくると思います。そんな動きに、私はしたいと思って今、取り組みをしているところです。

岡崎委員長　　ありがとうございました。

事前の打ち合わせで事務局の方にはいくつかお話をしたんですけれども、大山という、今日も雪が降ってあのスキーコースが見えていましたけれども、ああいうアウトドアで、片方では大山寺という非常に古い宿坊もあるところです。そういうものと、それから松江、出雲をつなぐような、これは日本の中でも歴史とか、あるいは風土、沖もあるわけですから非常に特筆されるべき地域です。地形的にも非常に面白い地形をしておりますから、こういうところをやっぱり広域で産業振興を図るにしろ、ツーリズムを素材にするにしろ、日本全国的なレベルで見ても非常に重要なポイントだと思います。

私は実はドイツの、特に南ドイツの方の農村集落整備事業を何度か調査で現地に伺っているんですけれども、ツーリズムということで言えば今、ドイツはルートツーリズムという、一番代表的なのはロマンチック街道という、ヴュルツブルクからフュッセン 300 キロぐらいをずっと南に、アウトバーンではなくて従来型の下道を走るという、約 300 キロのツーリズムのルートがあるわけです。

これがちょうどバイエルン州と隣りのバーデン・ビュルテンブルグ州の州境をうまく入ったり出たりしながら南に下って、日本人の観光客はそれからスイスの方へ抜けるという、そういうルートで、これはそれに連なるロマンチック街道協会というのが、市とそれから州政府をうまく巻き込みながら日本にも観光使節を出すくらい非常に今、積極的にやっております。

私はある意味じゃ、それに匹敵するような国際的なレベルで見ても価値のある地域だと思いますので、観光だけではなくて、アンテナショップの話もありました。そういう農業振興、農産物振興ということも含めて、期間は非常に短いですけれども、取りあえず何か将来が見えるようなところを目指して議論していただければ非常にありがたいと思っております。

村木委員　　資料を見ながら、それから先ほどちょっと寄ってきた出雲の社会実験を見ながら思ったことを少し言わせていただきたいんですけれども、今日の資料を見せていただくと、資料４で中間支援組織が担うべき機能のイメージがあって、なおかつそれを受けるようなかたちで資料６で、どんな事業をしますと。

この間が何か抜けているような感じが私は非常にしまして、機能のイメージをそれぞれが何を担って中間支援組織はどういう感じのことをやっていきますというのは資料４。これはわかりやすいんですが、ここから実際の事業がどういう個別の役割を担って最後はいったい何を目指していくのかというのが、いきなり事業が別に出ていってしまっているので、先ほどご意見で個別の人たちが何かするのにそんな力が割けないのではないかとか。パートナーシップ、要は中間支援組織に人が入っていくことによるメリットがあまり見えてこないというのはそこにあるんじゃないのかなという気がします。

そうしますとこのパイロット事業がどういう位置付けにあって、それをやっていくと最後いったい何になるというもう少し細かい、最初にパイロットがあった、その次に何をやると最後、最終的にどんなメリットがありますという構図みたいなものを見せてあげると、皆さんもう少し納得していただけるのではないかなと。それがまたあの中間支援組織を位置付ける上では役に立つのではないかと思いました。

というのは、先ほど私が言った社会実験は道路局のだったんですが、出雲市の通り名をつけて、そこに名称があってどんな店があるかという実験だったんですけど、出雲大社の横に大きな駐車場があって、そこに来た観光客の方のために通り名称をつけている。そこまではすごいよくわかるんですが、外を見た瞬間に前に空き店舗があったりすると、この先とても面白いものがあるのかなというのはまず疑ってしまう、観光客からすると。

そうすると、その通り名称をつけるという一つ目をやったら、次は観光客にとって餌になりそうなものをどう持っていくのかという次にやることは見えてきますよね。そういう感じで、第１ステップ、第２ステップという絵をもう少し見せてあげると、より協力してくださる方は増えていくのではないかと思いました。

あと事例の調査等のところで、イギリスのグラウンドワークが出てきていると思いましたけれども、確かに市民参加型で何かをやっていくという観点でこれはいいと思うんですが、広域的な観光という観点で考えると、リージョンベースでやっているタイプの広域ツーリズムの何かいろいろ資料等あります。そういうものをご覧になるといいかもしれませんし、前回私が確か申し上げたようなタウンセンターマネジメント。あれもリージョンごとにやっていったりしますので、それについては私ができることはさせていただきます。

岡崎委員長　ありがとうございました。

何か今のご発言についてありますか。

事務局　そういう意味で中間支援組織が、自分たちが結局何をしようとしているのかというところが、ちょっとうまく伝わっていないところがあるのかもしれない。その辺をうまく我々の方からきちんと外に出していくというか、皆さんメンバーにうまくわかるように伝えていきながら進めていきたいと思います。

それと、いろいろな海外の事例、特にお話とか、ちょっとまた先生のところにご相談に行きたいと思っております。ちょっとまだ、実はその中間支援組織、本当は今回でもやろうかと思ったところだったんですけれども、実際に立ち上げの準備がやっぱりかなり大変だった面があって、そこまで手が回らなかったという面があります。これからまたそんなように相談して、次回の委員会のときには資料をまとめて出したいと思っておりますのでよろしく

お願いします。

岡崎委員長　先ほどちょっと東北三県の話、アンテナショップでやりましたけれども、九州は今、対中国とか韓国からの観光客の受け入れということで、九州全体で広域的にいろいろな仕組みを動かしていますね。政策投資銀行さんなんかも入られて、そういう仕組みもありますから九州一つの案も調査対象になるかもしれません。

鈴木委員　そこを当初、前回もちょっと言わせていただいたんですけれども、あまり、ほかの事例があってそれを適用するというのだと、ますますこちらの現場が、先ほど一緒のお話がありましたけど、何か混乱するんだと思うんです。

村木先生のご指摘にあったところを今、埋めるべく、だからそのパイロット事業をやって、それをやっていくのに中間支援組織は本当にどうだったらいいのというのを、毎熊先生がおっしゃっているのはその実験事業として、モルモットとしてやっているので、だからあまり、せっかくそうやっているのに、実はこういうのもありますとやられちゃうと、ものすごくここの現場は混乱するんだと思います。

先に何かそれを与えられて、そこから対照比較できればいいと思うんですけど、自分らはやれと。別にこういうのがあるよ。その関係は誰がこの検証をするんですかと。そんな感じになっちゃうので、そこはうまく、確かに参考にすべきものはいっぱいあるとは思うんですけれども、こちらが必要としているものから参考にするところを選ぶような発想でやっていただくと、たぶんこちらでの問題解決ができて、こちらで問題解決できるとそれを通じて日本式というか、新しいタイプの中間支援組織なんだろうというのが見えてくるんじゃないかなと、そう思っています。

ですから、いろいろ教えていただくのはありがたいと思いますけども。

岡崎委員長　ほか、何かございますか。

石村委員　付け加えて、「山陰いいとこ１コメント優秀先候補」というのが資料で、簡単に説明だけさせていただきます。

山陰ポータルというホームページの方でオープニングのキャンペーンで募集したコメントのごくごく一部です。全体では 1300 弱ぐらい集まりまして、その 1300 の中、皆さんに見ていただいたあの一部で、ちょっとチョイスしてみたものです。このうち全体の 70 作品ぐらいにそのプレゼントを提供しようということで今、準備してだいたい決まったようですけども、これはそのごく一部です。

山陰に対する思いとかイメージとか、こういうふうに皆さん思っていらっしゃるということがこれでわかります。キーワードがもうそういうふうにちりばめられていまして、このエリアのこういうイメージづくりをする上で大変参考になるだろうと思いました。参考までに見ておいていいただければと思います。

それから皆さんにプレゼントということで、カレンダーをお持ちしました。大山乳業、白バラ牛乳と入っていますけども、実は私どももお手伝いをして全部作り、写真もそうですし、中のテキストもそうですし、これは本当にボランティアで４万点ぐらい。関西とか山陽筋、県内も含めて牛乳配達、宅配されている家に配るということで、これであればきっと大山に来て目を向けていただけるに違いないと思って、作って少し分けていただいたものを皆さんに使っていただければということでお持ちしました。

岡崎委員長　どうもありがとうございました。ちょっと時間を過ぎてしまいましたけれども、一応第２回目の委員会ということで、皆さんからいろいろ率直な意見を出していただいたと思いますので、それらをうまく入れて、また作業を進めていただくことと同時に、具体的なパイロット事業もぜひ皆さん、意見交換しながら進めていただければと思います。

事務局の方から最後に何かありましたら、どうぞ。

事務局　今後の委員会のスケジュールについて、資料９に基づき、ご説明いたします。

事前に、第３回、第４回の日程を調整させていただいておりまして、第３回は２月２３日、第４回は３月１３日となっておりますので、よろしくお願いいたします。次回、パイロット事業がもっと進んだ段階で、もう少し課題が出てくると思いますので、ご報告しながら、ご議論いただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

４．閉会

事務局　以上をもちまして、第２回「民間のイニシアティブを重視した地域振興方策に関する調査」検討委員会は閉会といたします。

なお、１７時よりこちらの会場で朝廣さんの講演会を開催いたしますので、よろしくお願いいたします。

本日は誠にありがとうございました。